

「大学生に関する意識調査」結果の概要

株式会社明治安田生活福祉研究所（社長 服部秀昭）は、全国の大学1～4年生男女を対象に、大学生活や就労、結婚・出産、社会に対する意識など多岐にわたってアンケート調査を実施しました。調査結果の概要は以下のとおりです。

< 主な内容 >

< ページ >

あなたはどの大学生タイプ? ◆ 大学生 4つのタイプの特徴は ◇ 文友両道 タイプ ◇ 学者肌 タイプ ◇ 体育会系 タイプ ◇ デジタリアン タイプ	4
I. 就労について ◆ 就職活動で評価される資質は「社交性」「リーダーシップ」 — “内定” と “非内定” の分かれ道	8
◆ まずは“安定性”。次いで男子は“将来性”、女子は“仕事の面白さ” — 就職先を選ぶポイント	13
◆ 就職活動を通じて社会・時事への関心がアップ — 就職活動は社会への入口か?	14
II. 大学生活について ◆ 今どきの大学生は、好奇心旺盛で責任感はあるが、リーダーシップや社交性がネック	17
◆ 大学生活“満足派”は仲間や恋人と一緒にいる時間、“不満派”はおひとりさまの時間が楽しい	20
◆ 少子化対策にはひとり暮らし?	23
III. 結婚観・子ども観 ◆ 男子は“LOVE”、女子は“LIFE” — 結婚したい理由	29
◆ “お仲間タイプ”は、結婚・子どもに前向き — タイプ別の結婚観・子ども観	34

※本資料は、日本銀行金融記者クラブ、文部科学記者会、厚生労働記者会に配布しております。

ご照会先	(株)明治安田生活福祉研究所 生活設計研究部 横田・篠原・奥野・森	電話：03(3283)9297 FAX：03(3201)7837 Eメール：rbj@myilw.co.jp
------	---	---

<調査の概要>

- (1) 調査対象： 全国の大学1～4年生の男女
- (2) 調査方法： WEB アンケート調査（マクロミル社提供サンプルを使用）
- (3) 調査時期： 2010年6月16日～18日
- (4) 回収数： 4,120人
- (5) サンプルの属性

①性別・学年（上段はサンプルの人数、下段は割合） （人、％）

	大学1年生	大学2年生	大学3年生	大学4年生	計
男子	515	515	515	515	2,060
	12.5	12.5	12.5	12.5	50.0
女子	515	515	515	515	2,060
	12.5	12.5	12.5	12.5	50.0
計	1,030	1,030	1,030	1,030	4,120
	25.0	25.0	25.0	25.0	100.0

②大学所在地別割合 （％）

北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	合計
3.5	5.2	46.4	13.5	18.7	4.3	1.5	6.9	100.0

③国立・公立・私立大学別割合 （％）

国立	公立	私立	合計
26.5	7.1	66.4	100.0

④入試タイプ別の割合 （％）

一般入試	附属高校からの進学	指定校推薦	AO・公募推薦等	その他	合計
67.2	4.2	11.7	14.5	2.4	100.0

（注）本調査では、性別・学年による8つの区分毎に同数のサンプルを回収。

そのため、サンプルの属性分布は実際の大学生全体のものとは異なっているが、補正は行っていない。

目 次

あなたはどの大学生タイプ？

- 大学生 4つのタイプの特徴は…………… P. 4
「文友両道タイプ」「体育会系タイプ」「学者肌タイプ」「デジタリアンタイプ」

I. 就労について

1. 大学4年生 就職“内定”と“非内定”の分かれ道…………… P. 8
2. 志望進路について…………… P. 11
3. 就職先を選ぶポイント、仕事に対する不安…………… P. 13
4. 就職活動は社会への入口か？…………… P. 14

II. 大学生活について

5. 大学生のライフスタイル…………… P. 16
6. 今どきの大学生気質…………… P. 17
7. 大学生活“満足派”と“不満派”…………… P. 20
8. 自宅通学とひとり暮らし…………… P. 23
9. 読書量と情報入手手段…………… P. 25
10. マンガは、大学生の社会性醸成には役に立たない？…………… P. 27

III. 結婚観・子ども観

11. 結婚観…………… P. 29
12. 子ども観…………… P. 31
13. タイプ別の結婚観・子ども観…………… P. 34
14. 結婚・出産後の働き方…………… P. 35

あなたはどの大学生タイプ？

(1) 大学生 4つのタイプの特徴は

大学生のタイプは大きく4つに分類できるようです。タイプ別に「内定状況」「就職先を選ぶポイント」「仕事での志望部門」「結婚・子ども観」についての特徴を見てみました。

文友両道 タイプ

人との触れ合いを大切にし、読書好き

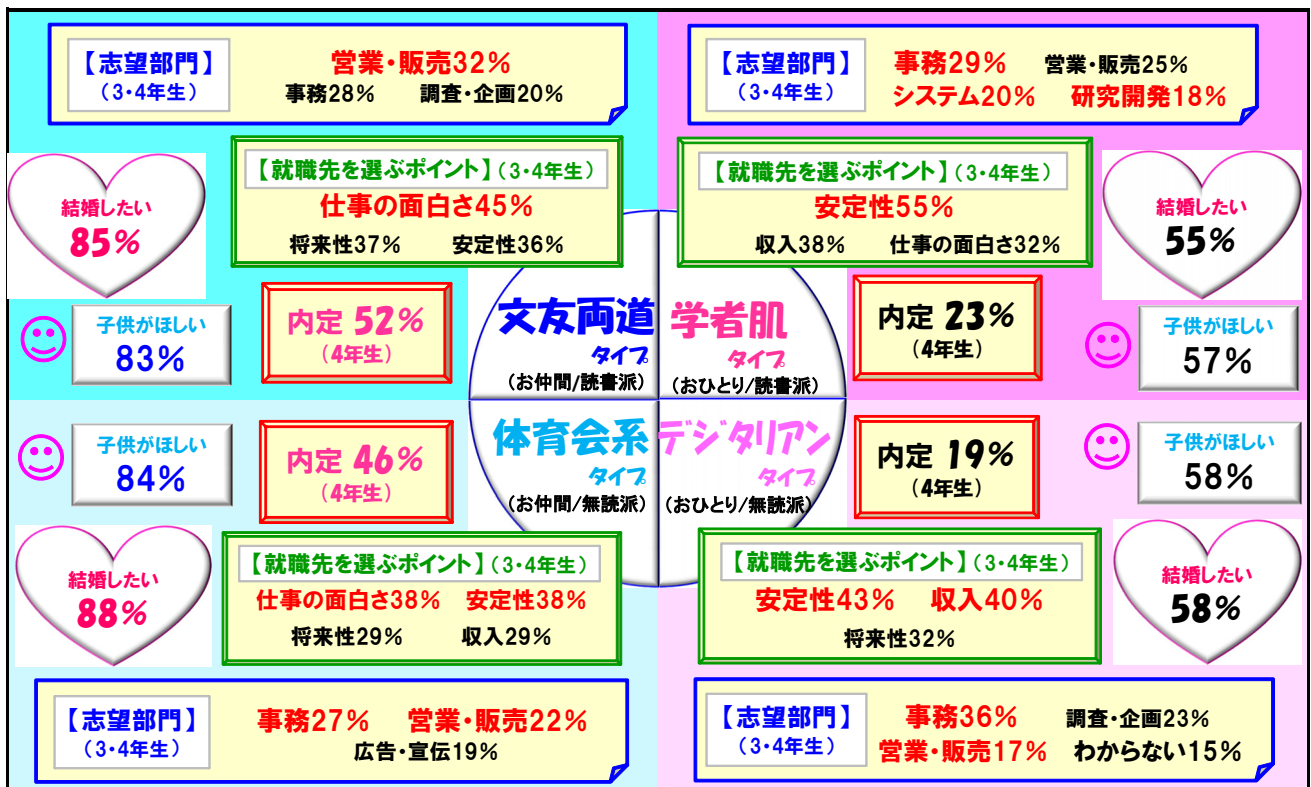
- 就職内定率が最も高い (52%)。
- 就職先を選ぶ際には、仕事の面白さを最も重視。
- 仕事での志望部門は、人との接点が多い営業・販売部門を希望。
- 結婚にも子どもにも前向き。

学者肌 タイプ

ひとりの時間を楽しみ、読書好き

- 就職内定率はあまり高くない (23%)。
- 就職先を選ぶ際には、安定性を最も重視。
- 仕事での志望部門は、黙々と仕事に没頭するシステム部門・研究開発部門が比較的多いのが特徴。
- 結婚や子どもにはそれほど前向きではない。

あなたはどの大学生タイプ？



体育会系 タイプ

人との触れ合いを大切にし、読書嫌い

- 就職内定率は文友両道タイプに次いで高い (46%)。
- 就職先を選ぶ際には、仕事の面白さとともに安定性を重視。
- 仕事での志望部門は、ルーティンワークの多い事務部門を希望。
- 結婚にも子どもにも前向き。

デジタリアン タイプ

ひとりの時間を楽しみ、読書嫌い

- 就職内定率は最も低い (19%)。
- 就職先を選ぶ際には、安定性・収入を重視。
- 仕事での志望部門は、事務部門が最も多く、営業・販売部門が低い。「わからない」も比較的多い。
- 結婚や子どもにはそれほど前向きではない。

(2) 4つのタイプ分類の方法

以下の2つの軸を使って、大学生を4つのタイプに分類しています。

① 「特に楽しいと感じるのは、何をしているときですか？」に対する回答によるタイプ分け

	お仲間タイプ	おひとりタイプ
右のいずれかを選択	「恋人との時間」 「友人との時間」 「部・サークル・同好会」	「一人の時間」 「インターネットによる情報収集」 「ゲーム」
右のいずれも非選択	「一人の時間」 「インターネットによる情報収集」 「ゲーム」	「恋人との時間」 「友人との時間」 「部・サークル・同好会」

② 「1カ月に本（授業関連の書籍・雑誌・マンガを除く）を何冊くらい読みますか？」に対する回答によるタイプ分け

「月1冊以上読む」 読書派 ⇔ 「ほとんど読まない」 無読派

【4つのタイプ分類】

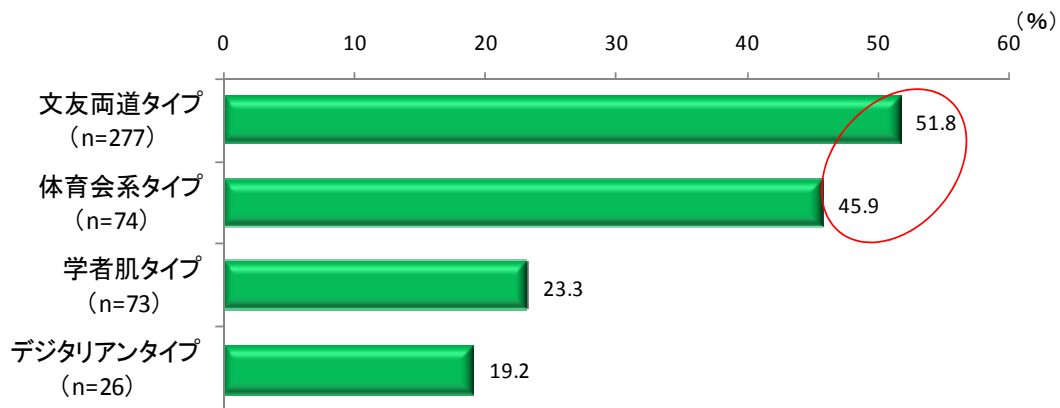
大学生のタイプ		楽しみによる分類	読書量による分類
文友両道 タイプ		お仲間タイプ	読書派（月1冊以上読む）
体育会系 タイプ		お仲間タイプ	無読派（ほとんど読まない）
学者肌 タイプ		おひとりタイプ	読書派（月1冊以上読む）
デジタリアン タイプ		おひとりタイプ	無読派（ほとんど読まない）

(注) タイプのネーミングは、あくまで当研究所がイメージとしてとらえたものです。

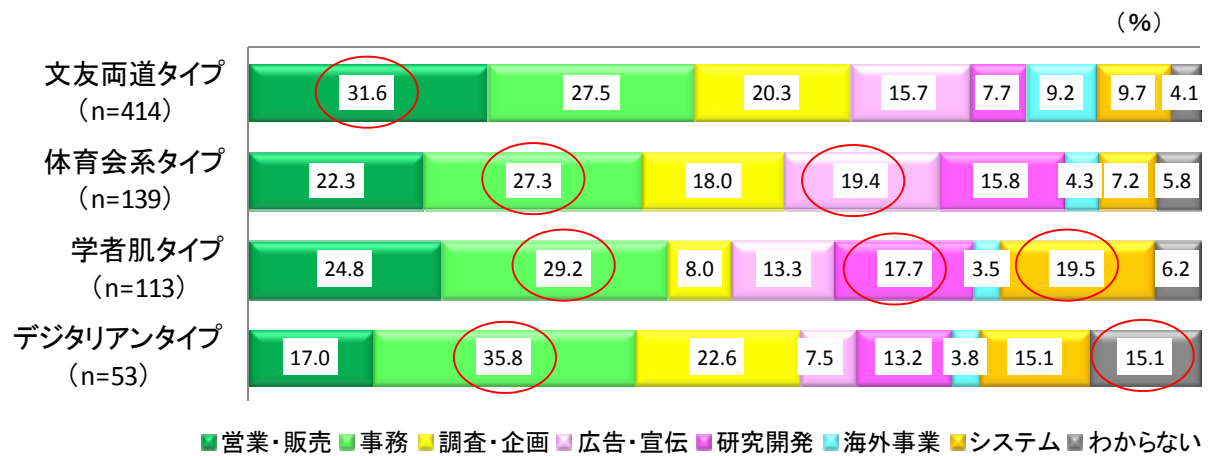
このネーミングによるタイプを評価・批判するものではありません。

【関連データ】

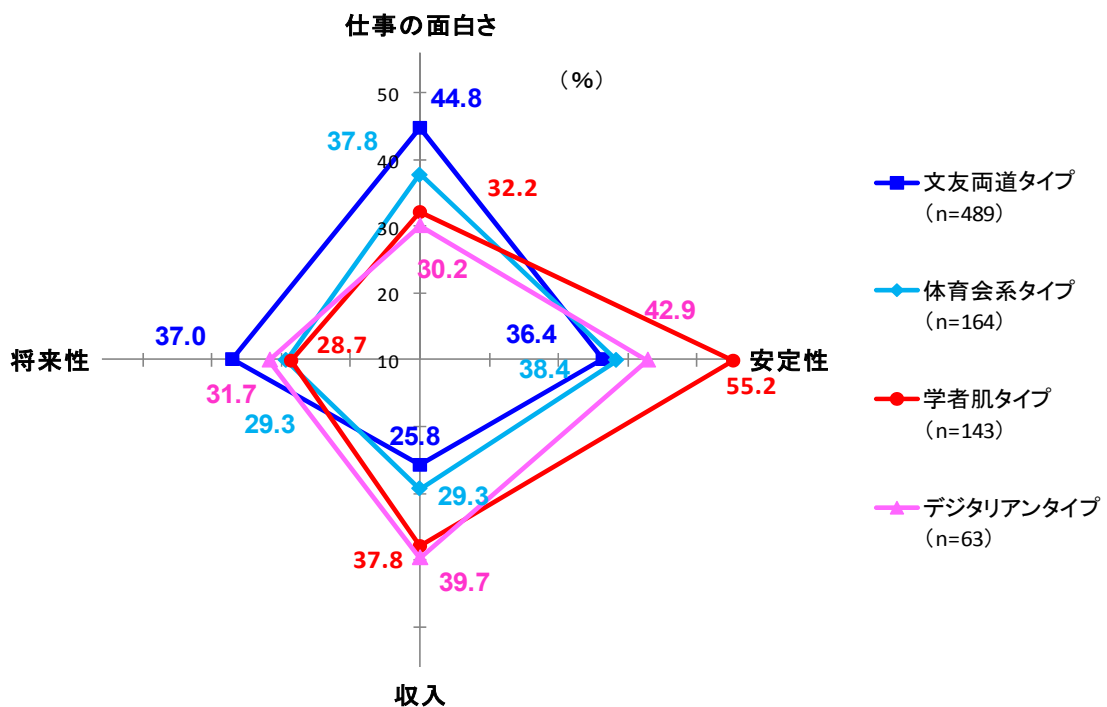
< 4年生6月時点での内定状況 >



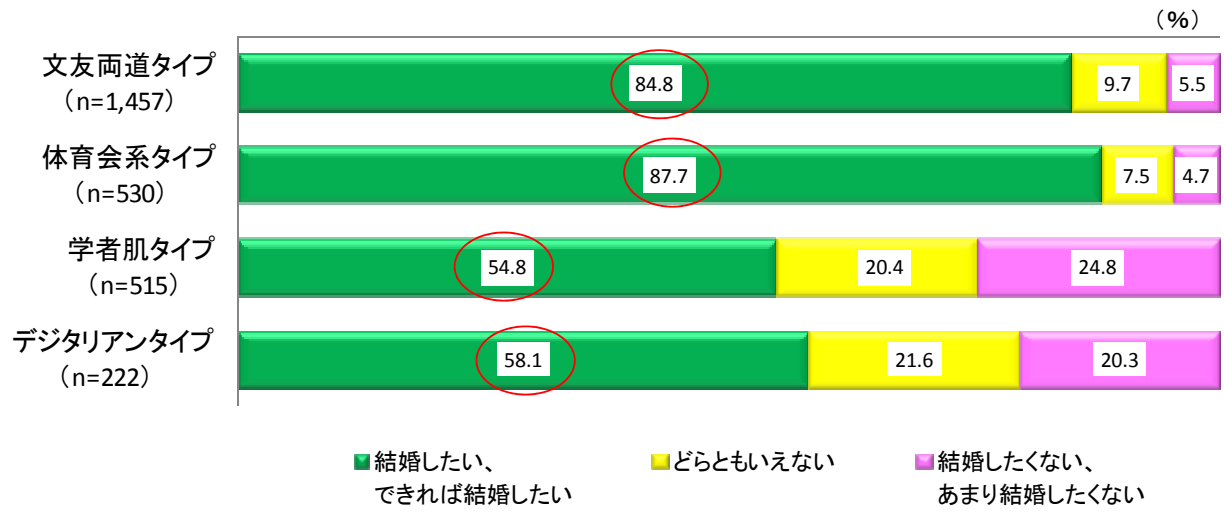
< 3・4年生の志望部門 >



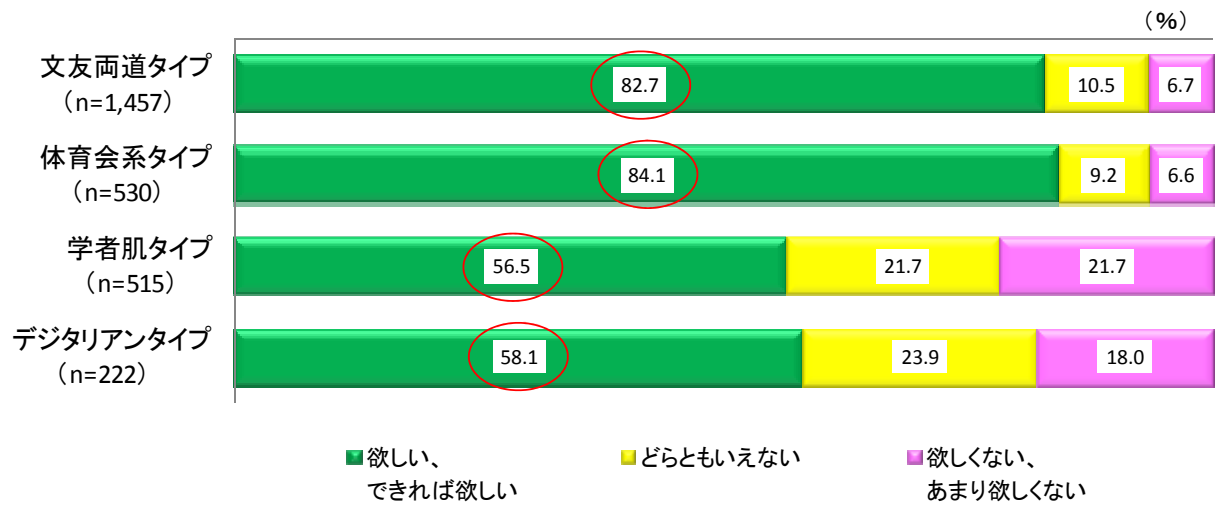
< 就職先選定のポイント >



<結婚したいか>



<子供が欲しいか>



I. 就労について

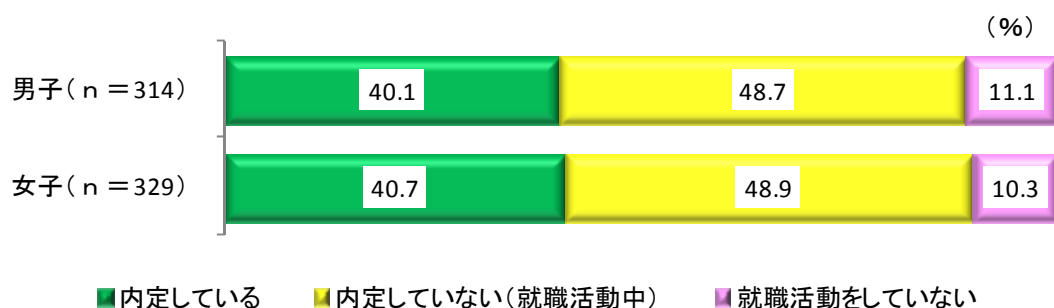
1. 大学4年生 就職“内定”と“非内定”の分かれ道

- 就職活動で評価される資質は、「社交性」「リーダーシップ」
- サークル活動に取り組んだ人の内定率が高い
- 就職活動を早く開始した人ほど内定率が高い

(1) 「社交性」「リーダーシップ」のある人が就職活動では評価される

就職を希望している大学4年生の、調査実施時点（2010年6月）における内定率は、男女とも約4割。4年生の初夏の時点としては厳しい状況と言えます。

図表1-1 内定状況（企業・官公庁・教職に就職希望の4年生が対象）



自分自身がどのような性格・タイプにあてはまるか、11項目について尋ねました。そのうち、就職内定状況に関係がありそうな性格・タイプについて、内定・非内定別に違いを見てみました。

内定者と非内定者で差が大きかった性格・タイプは、「社交性」（17.5ポイント差）、「リーダーシップ」（16.7ポイント差）です。外向的な性格が、就職活動にもプラスに作用していることが考えられます。もっとも、「リーダーシップ」については、内定者でも52.7%にすぎず、現在の若い人に欠けている資質という見方もできるかもしれません。

他の3項目でも内定者のほうが高い傾向を示していますが、上記2項目ほど大きな差はありませんでした。

図表1-2 4年生の内定・非内定別にみた性格・タイプ (%)

項目	内定者 (n=260)	非内定者 (n=314)	差
社交性がある	73.8	56.4	17.5
リーダーシップがある	52.7	36.0	16.7
好奇心が旺盛である	83.1	74.8	8.3
一人よりチームで仕事をするのが向いている	56.5	51.0	5.6
責任感が強い	85.0	79.9	5.1

(注) 「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した人の割合

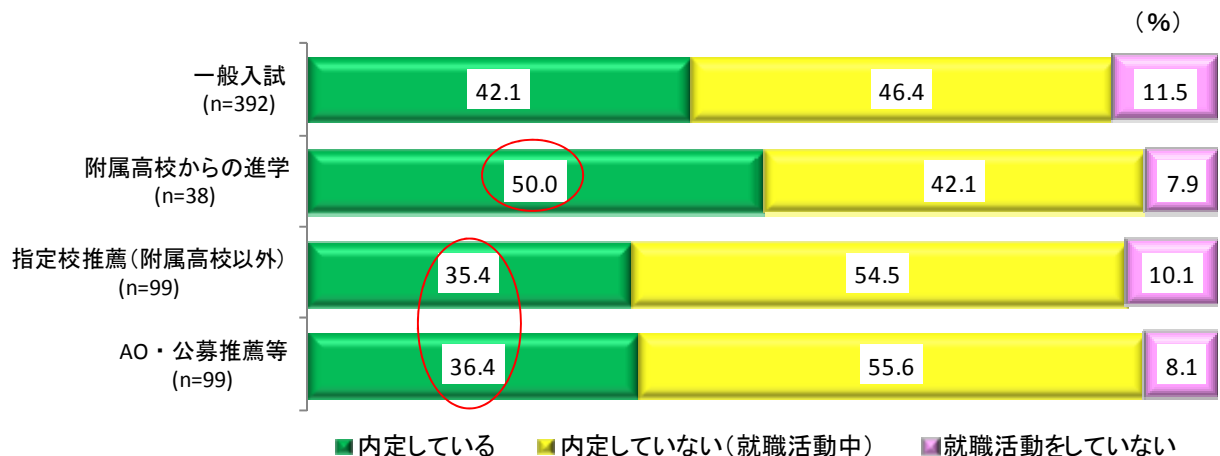
(2) 大学や大学生活などで相違する内定状況

以下、内定者と非内定者との違いについて、さまざまな角度から見てみました。

① 大学入試タイプによる違い

サンプル数は少ないものの、「附属高校からの進学」した人の内定率が最も高く 50.0%。次いで「一般入試」が 42.1%。一方、「指定校推薦（附属高校以外）」「AO・公募推薦等」の内定率はともに 30%台と苦戦している様子がうかがわれます。

図表 1-3 大学入試タイプ別にみた内定状況

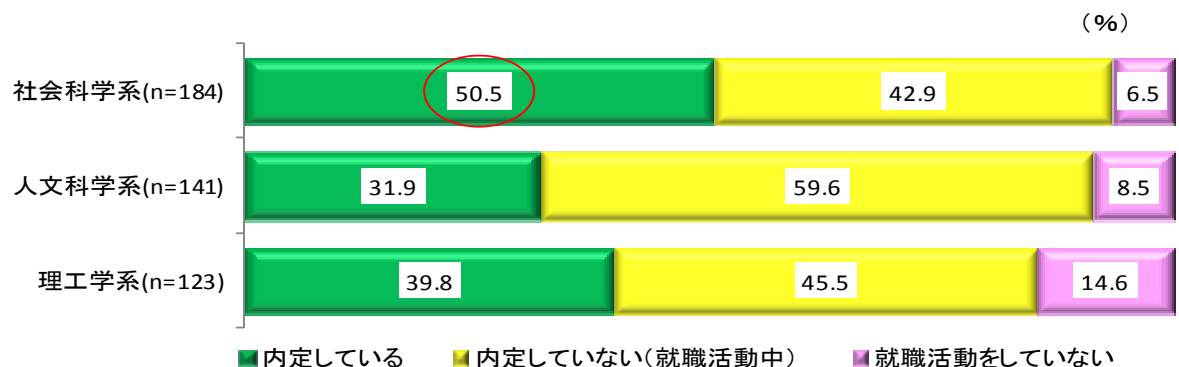


② 学部による違い

「社会科学系」の内定率が 5 割超であるのに対し、「人文科学系」「理工学系」はともに 3 割台と厳しい状況です。

なお、「理工学系」で「就職活動をしていない」人の割合が高いのは、教授の推薦があるため就職活動の必要がないケースなどが影響している可能性があります。

図表 1-4 学部別にみた内定状況

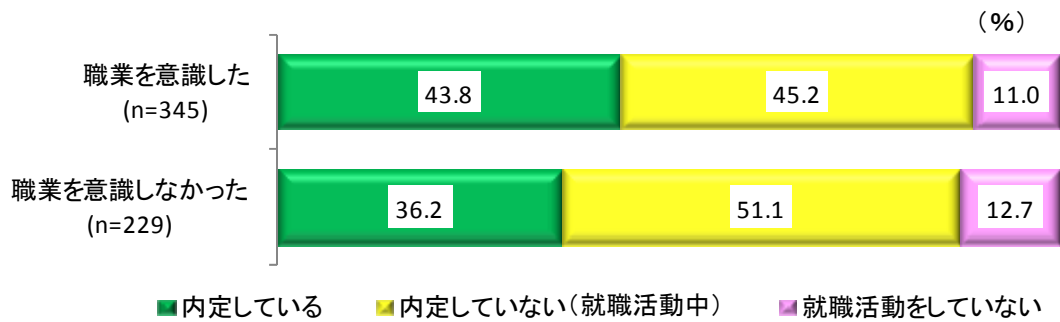


③ 職業を意識して大学を選択したか否かによる違い

職業を意識して大学を選択したか否かによっても、内定率に差が見られます。「職業を意識した」人は、そうでない人に比べて 7.6 ポイント内定率が高くなっています。

大学を選択する際の目的意識の差が、就職にも影響を与えていることが分かります。

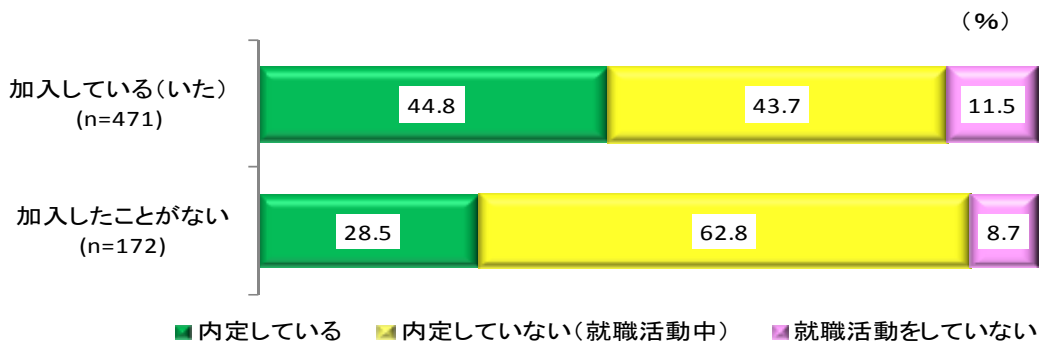
図表 1-5 大学選択時の職業への意識別内定状況



④ サークル活動の取り組み状況による違い

サークル活動に「加入している (いた)」人の内定率は、「サークル活動に加入したことがない」人に比べて 16.3 ポイント高くなっています。サークル活動を通じて、社会人として必要な資質 (社交性、リーダーシップなど) が養われることによるものと推察されます。また、サークルのOB・OGとの人脈が、就職活動にプラスに作用していることも要因と考えられます。

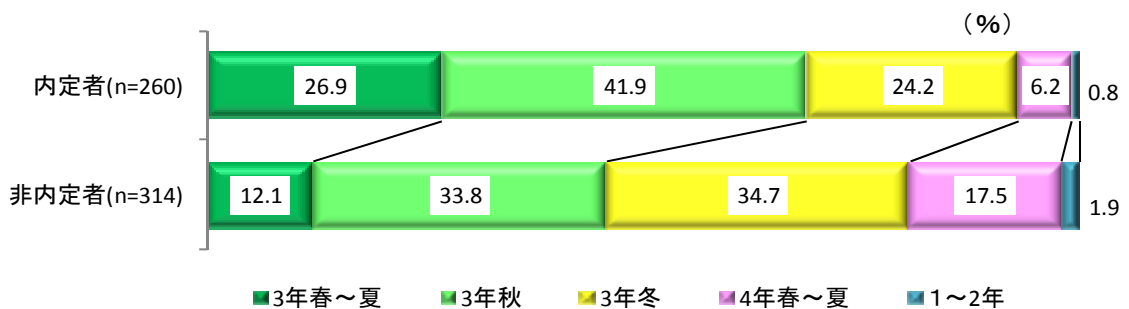
図表 1-6 サークル活動の取り組み状況と内定状況



(3) 就職活動の開始時期

就職活動の開始時期と内定状況の関係を見たところ、内定者は「3年秋」に活動を開始した人が 41.9%で最多でしたが、「3年春～夏」に開始した人も 26.9%います。一方、非内定者は「3年秋」と「3年冬」に開始した人が約 3分の1で拮抗しており、内定者より開始時期が遅い傾向が見られます。就職活動は、早く始めたほうが良いという結果になりました。

図表 1-7 就職活動の開始時期による内定状況



2. 志望進路について

○志望進路は進級につれ、より現実的に — 入学当初は「〇〇師」「◇◇士」をめざしていても…
○4年生でも1割が、進路が「まだわからない」

(1) 志望進路

志望進路は、「企業に就職」が1・2年生では35%程度ですが、3・4年生では約50%に上昇。一方、「専門職」「官公庁」「教職」が低下しているのは、難度の高い資格・試験等に関わる職業を回避する学生が増えることによるものと思われます。

「大学院」は、学年による変化はあまり見られません。「大学院」は、理工学系の約40%、農林水産系の約25%の学生が志望していますが、これらの学生は1年時から大学院志望を決めているケースも多いのかもしれませんが。

また、「まだわからない」の回答は、学年とともに減少していますが、4年生の6月時点でも約1割の学生が進路を決めかねているようです。

図表2-1 志望進路（回答全体の上位5項目）

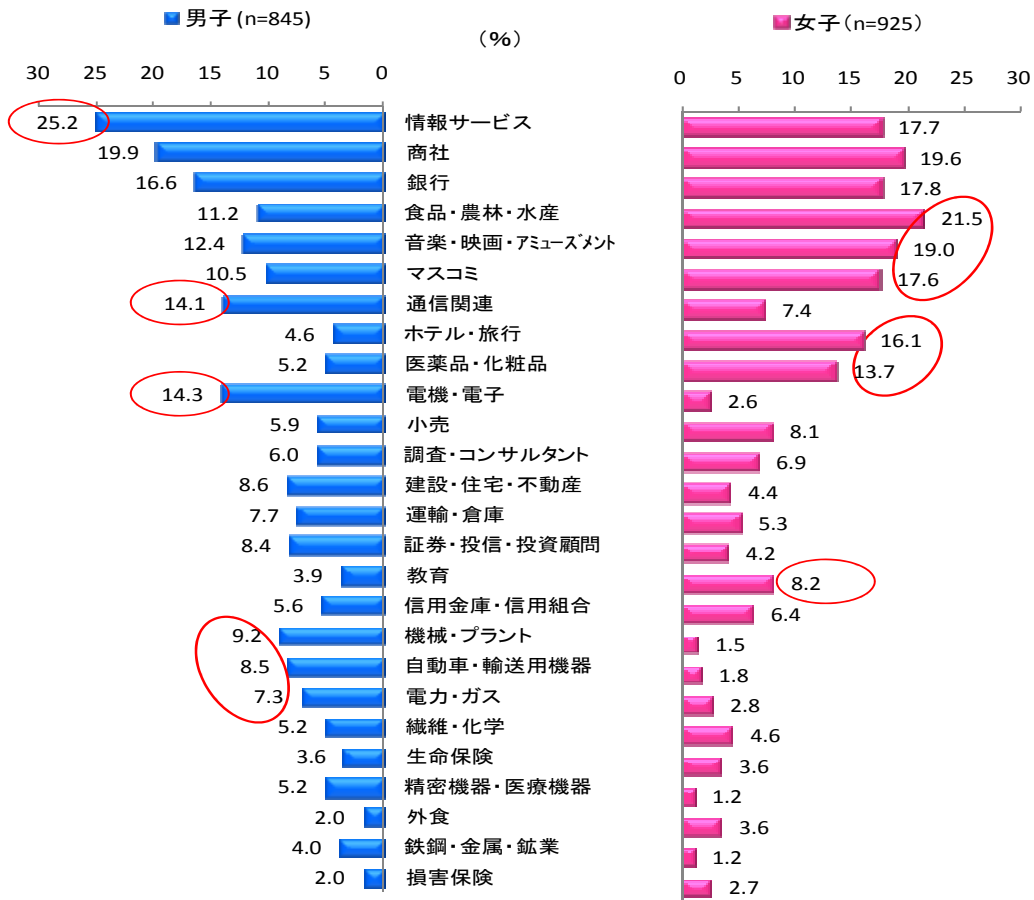


(2) 志望業界

志望業界は、男子では「情報サービス」「通信関連」「電機・電子」「機械・プラント」「自動車・輸送用機器」「電力・ガス」業界が女子より多く、女子では「食品・農林・水産」「音楽・映画・アミューズメント」「マスコミ」「ホテル・旅行」「医薬品・化粧品」「教育」業界が多い状況です。

なお、図表は掲載していませんが、「音楽・映画・アミューズメント」「マスコミ」等は学年とともに低下しており、より現実的になってくる様子が見えます。

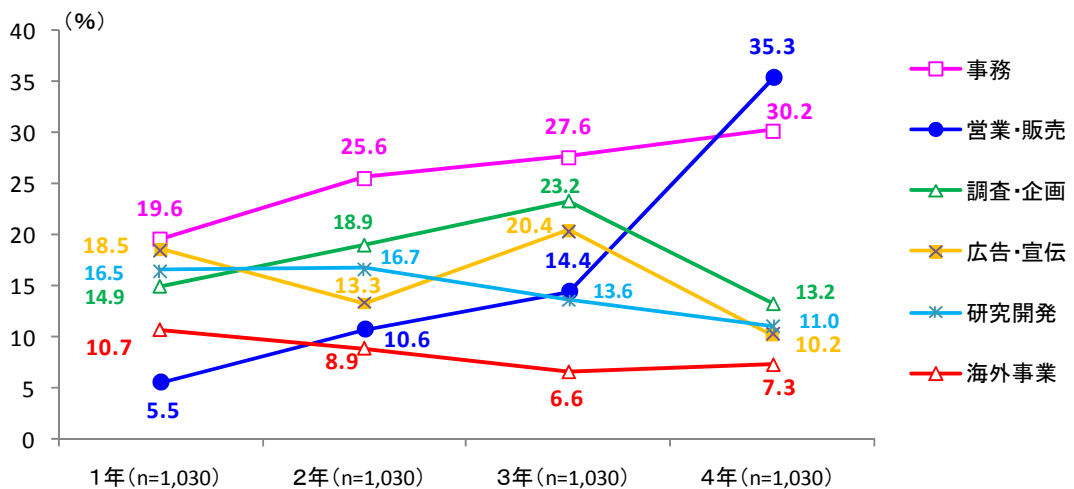
図表 2-2 志望業界（3つまで選択。企業に就職志望の1～4年生が対象）



(3) 志望部門

就職後に志望する部門は、「事務」「営業・販売」「調査・企画」「広告・宣伝」「研究開発」がトップ5となっています。3年から4年にかけて「調査・企画」「広告・宣伝」「研究開発」の志望者が減少し、「営業・販売」「事務」が増加、特に「営業・販売」が大きく増加しています。

図表 2-3 志望部門（2つまで選択）



このように、志望進路・業界・部門ともに、学年が上がり実際に就職活動の時期を迎えると、本人の特性や就職環境等を考えて、より現実的なものになっていく様子が見られます。

3. 就職先を選ぶポイント、仕事に対する不安

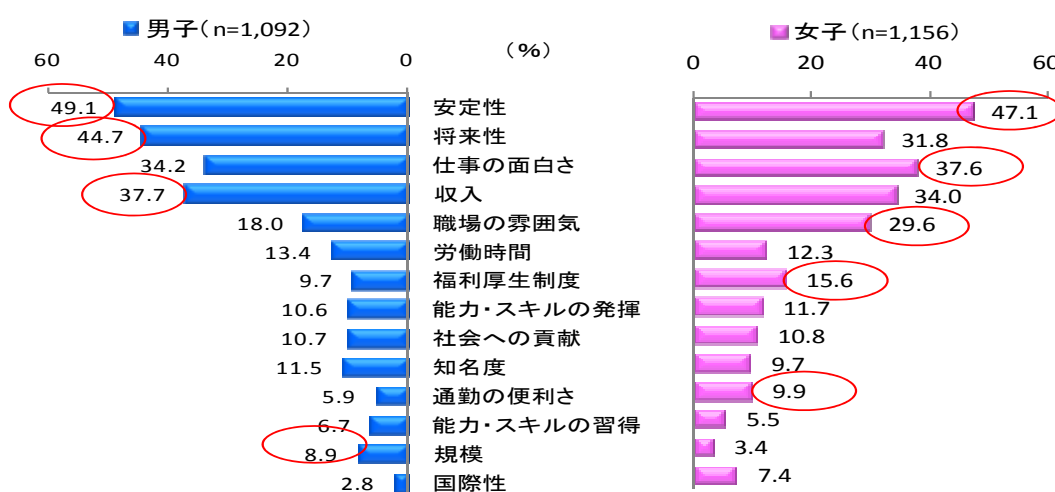
○まずは“安定性”。次いで男子は“将来性”、女子は“仕事の面白さ” — 就職先を選ぶポイント
 ○女子は“人間関係”、男子は“仕事がうまくいくか” — 将来仕事をするうえでの不安

(1) まずは“安定性”。次いで男子は“将来性”、女子は“仕事の面白さ” — 就職先を選ぶポイント

「就職先を選ぶときに重視する点」については、全体では、「安定性」「将来性」「仕事の面白さ」「収入」「職場の雰囲気」が上位5項目となっています。

男女別では、男子は、「将来性」「収入」「規模」など、“将来の経済的安定”に関わる項目が女子より高く、女子は、「仕事の面白さ」「職場の雰囲気」「福利厚生制度」「通勤の便利さ」など、“実利的”な項目が男子より高くなっています。

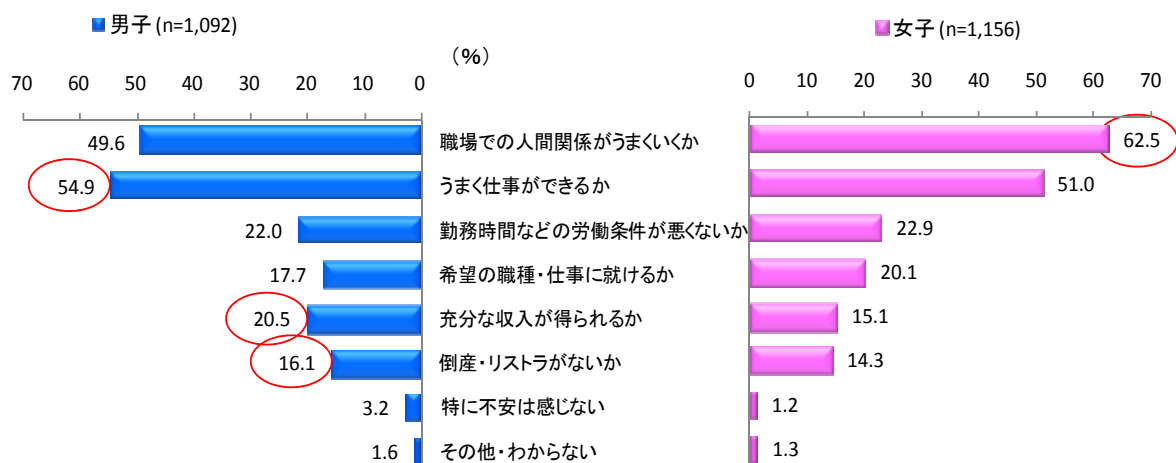
図表3-1 就職先選定の際に重視するポイント（3つ以内で選択。企業・官公庁に就職、教職志望の1～4年生が対象）



(2) 女子は“人間関係”、男子は“仕事がうまくいくか” — 将来仕事をするうえでの不安

女子は「職場での人間関係」に対する不安が最も多く、男子は「うまく仕事ができるか」が最も多くなっています。また、男子では「十分な収入が得られるか」「倒産・リストラがないか」など“将来の経済的安定”に関わる不安が女子を上回っており、上記“就職先を選ぶポイント”と同様の傾向を示しています。

図表3-2 仕事をするにあたっての不安（2つ以内で選択。企業・官公庁に就職、教職志望の1～4年生が対象）



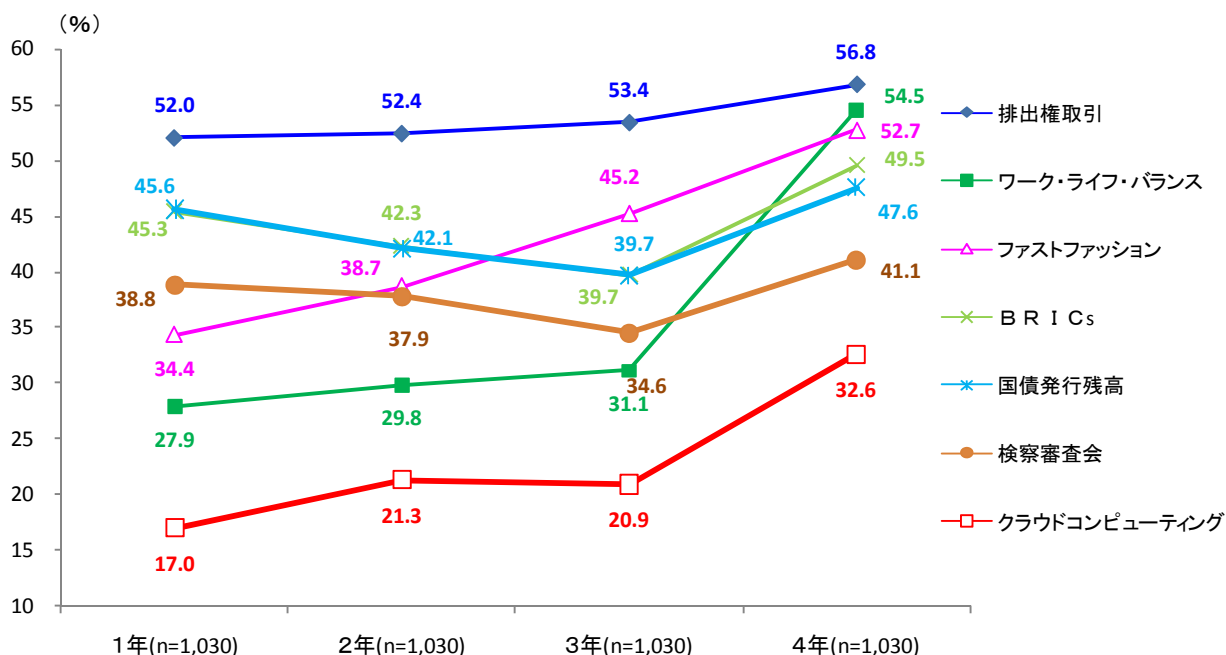
4. 就職活動は社会への入口か？

- 大学4年生になると時事用語の理解度が大幅にアップ
- 就職活動を通じて社会・時事への関心がアップ

(1) 大学4年生になると時事用語の理解度が大幅にアップ

大学生の社会性を探るために、7つの時事用語に対する理解度を学年別に見たところ、すべての項目で、4年生になると理解度が大幅に上昇することが分かりました。

図表4-1 時事用語の理解度（学年別）



(注) 理解度は、「内容までよく理解している」「内容をだいたい理解している」と回答した人の合計割合

(2) 就職活動を通じて社会・時事への関心がアップ

4年生になって理解度が大幅に上昇する理由を探るために、4年生を「就職内定者」「就職非内定者」「就職活動をしていない人」の3つのグループに分けて理解度を見てみました。

その結果、理解度には「就職内定者」>「就職非内定者」>「就職活動をしていない人」という傾向が見られました。これは、以下のようなことを示唆していると思われます。

① 就職活動で時事用語の学習機会が増える

就職活動をしていない人の理解度が最も低いのは、就職活動に備えた時事用語への関心および学習の機会が不足していることが原因であると推察されます。言い換えると、就職活動は“社会への入口”の役割を果たしていると考えられることもできます。

なお、7項目のうち「検察審査会」については、ほとんど差が見られませんでした。この言葉は本年4月以降脚光を浴びた言葉であり、就職活動をしていたか否かの影響が少なかったことによるものでしょう。

②社会・時事への関心の高さは、就職に有利

内定者と非内定者との比較では、内定者のほうが明らかに理解度は高いという結果が出ています。社会・時事への関心が高いことが、就職活動に有利に働くということが言えるのではないのでしょうか。

図表 4-2 時事用語の理解度（4年生） （％）

項目	内定者 (n=260)	非内定者 (就職活動中) (n=314)	就職活動をしていない (n=69)
ワーク・ライフ・バランス	79.6	58.6	43.5
国債発行残高	73.8	46.2	46.4
ファストファッション	70.4	50.3	50.7
排出権取引	70.0	52.5	49.3
B R I C s	69.6	51.0	43.5
クラウドコンピューティング	53.5	25.8	24.6
検察審査会	41.2	41.1	37.7

Ⅱ. 大学生活について

5. 大学生のライフスタイル

- 4年生は、就職活動が学習時間の減少に影響？
- アルバイト経験は、就職活動への自信につながる

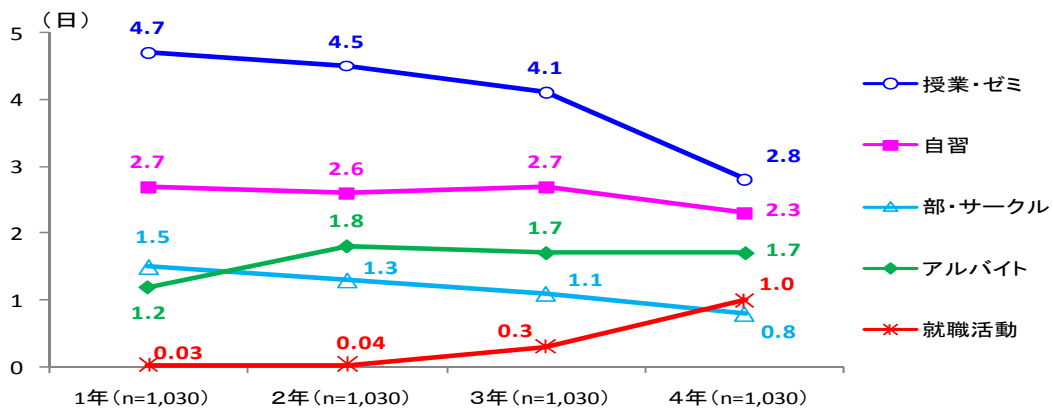
(1) 大学生の平均的なライフスタイル

1週間をどのように過ごすかについて見たところ、1～3年生では、「授業・ゼミ」に4日強、また「自習」に3日弱あてており、真面目に勉学にいそしむ姿がうかがえます。

一方、4年生では、「授業・ゼミ」は2.8日、「自習」は2.3日に減少しています。必須の授業が減ることもありますが、就職活動のために勉学にあてる時間が十分取れないことも一因かもしれません。

また、「部・サークル」の日数は、1年生が最も多く学年が上がるごとに減少し、逆にアルバイトは1年生より2年生以上が多くなっています。

図表 5-1 大学生の平均的なライフスタイル（1週間あたりの平均日数）

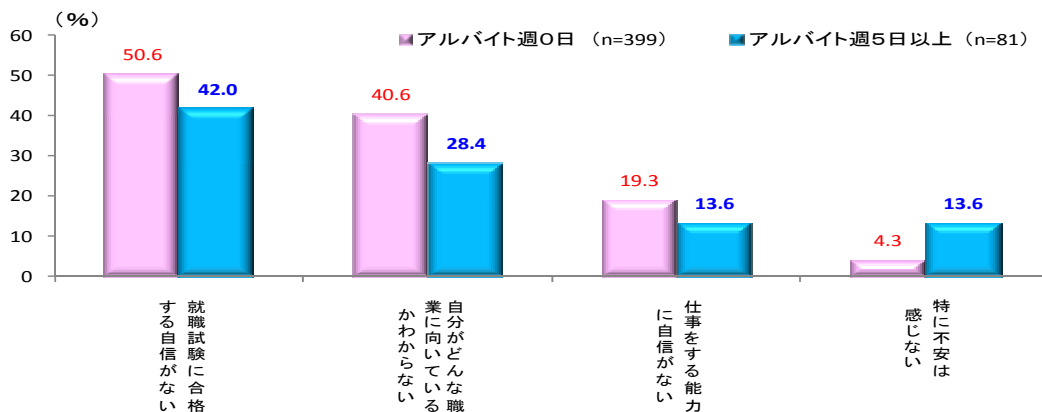


(2) アルバイト経験は、就職活動に向けての自信につながる

「就職活動をするにあたっての不安」について、「アルバイトを週5日以上している学生」と「アルバイトをしていない学生」を比較してみました。前者は「特に不安は感じない」の割合が高く、「就職試験に合格する自信がない」「自分がどんな職業に向いているかわからない」「仕事をする能力に自信がない」の割合が低くなっています。

アルバイトの経験が、就職活動に向けての自信につながると言えそうです。

図表 5-2 3・4年生のアルバイト日数と就職活動に対する不安



6. 今どきの大学生気質

- 好奇心旺盛で責任感はあるが、リーダーシップや社交性がネック
- 大学生活や就職活動を通じて、社会に適応できる資質・能力が醸成される
- 性格タイプは、仕事での志望部門にも影響

自身の性格タイプに関する質問に対する回答結果から、今どきの大学生気質を見てみました。

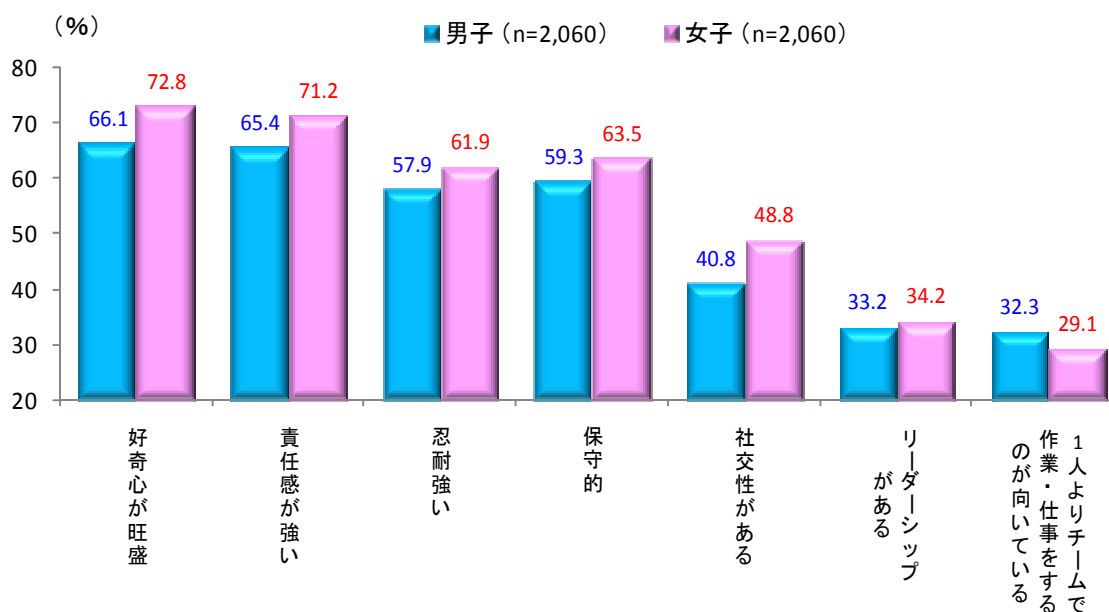
(1) 好奇心旺盛で責任感はあるが、リーダーシップや社交性がネック

全体では、「好奇心が旺盛」「責任感が強い」タイプにあてはまるとの回答が約7割である一方、「社交性がある」「リーダーシップがある」「チームで作業・仕事をするのが向いている」は3～4割にとどまっています。

今の大学生の気質として“好奇心が旺盛で責任感はあるが、リーダーシップや社交性が弱い”といった傾向がうかがえます。

男女別では、「好奇心が旺盛」「責任感が強い」「忍耐強い」「社交性がある」の割合が女子のほうが高く、“活動的で芯も強い女子大生”像がうかがえます。もっとも、女子は「保守的」「1人で作業・仕事をするのが向いている」といった一面も見られます。

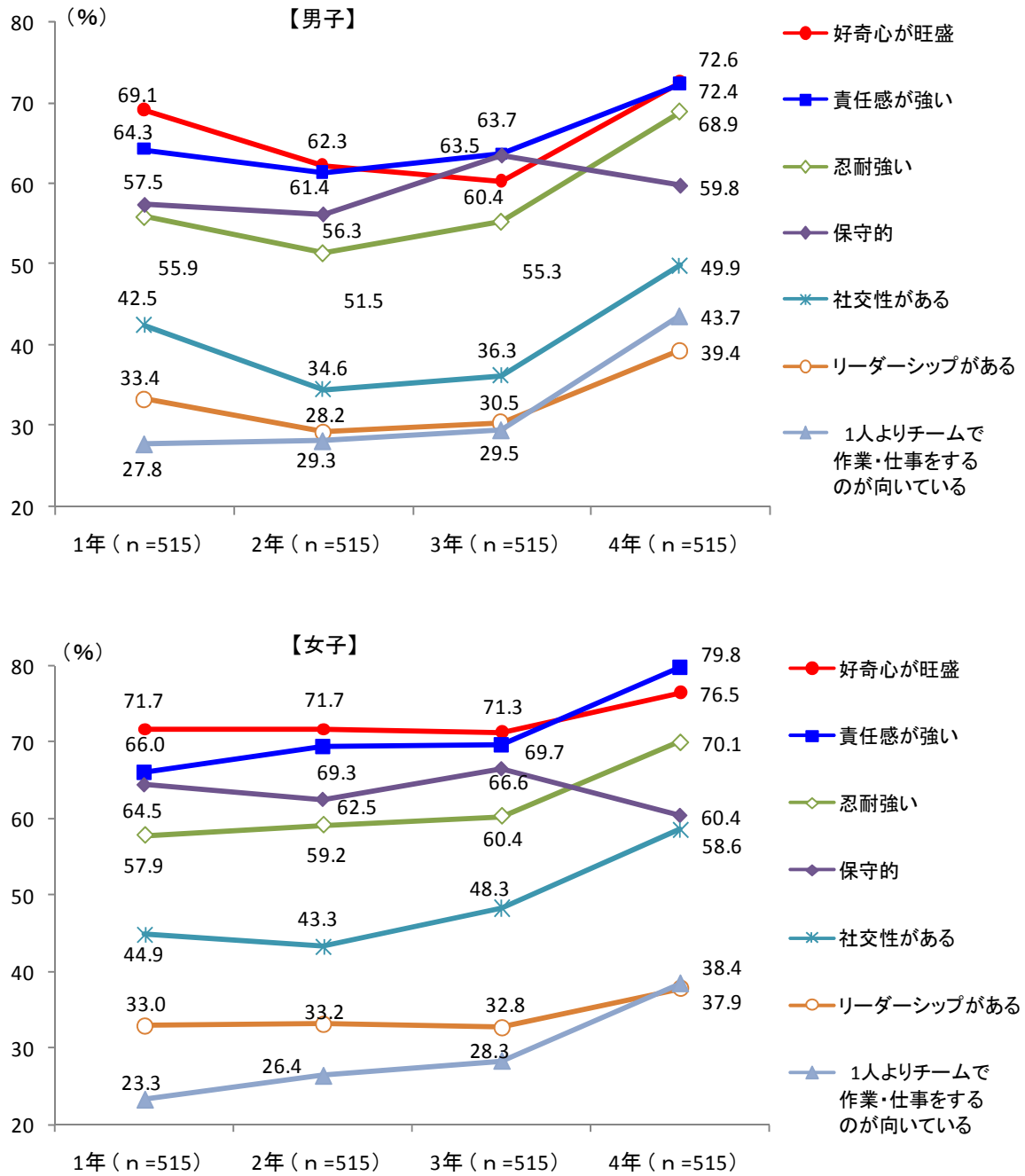
図表 6-1 性格タイプ別の「あてはまる」「ややあてはまる」の回答割合 (1~4年生)



また、学年別にみると、男女とも4年生で、「社交性がある」「責任感が強い」「忍耐強い」「チームで作業・仕事をするのが向いている」の割合が大幅に上昇しています。

大学生活や就職活動を通じて、社会に適応できる資質・能力が醸成されるものと考えられます (図表 6-2)。

図表 6-2 性格タイプの学年別割合（「あてはまる」「ややあてはまる」の割合）



(2) 性格タイプは仕事での志望部門にも影響

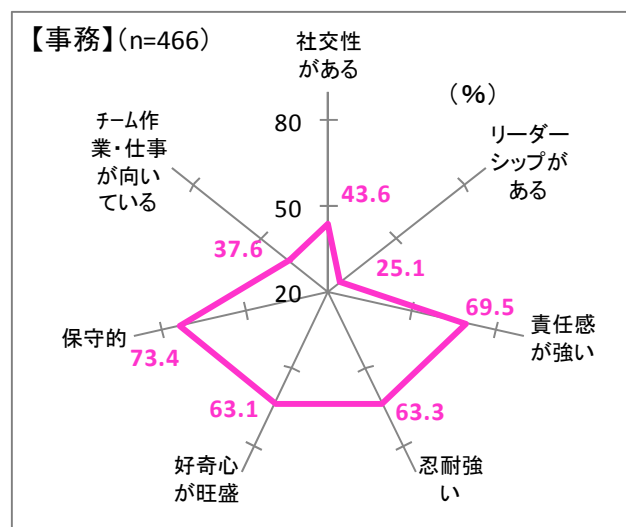
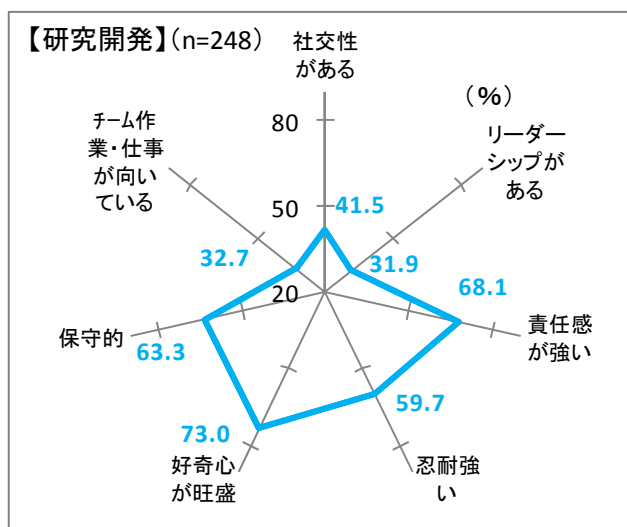
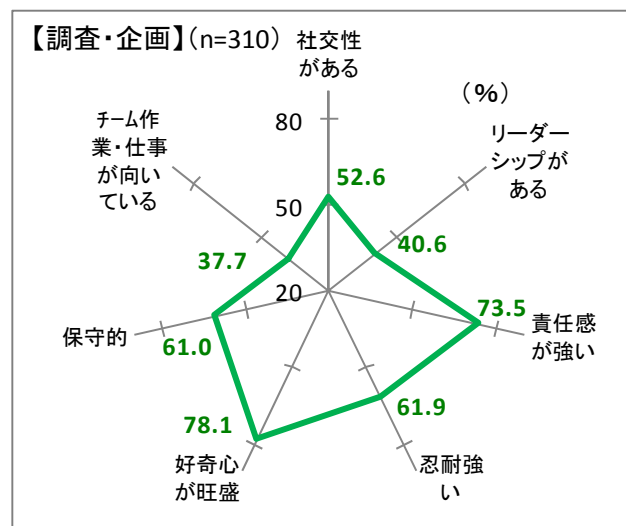
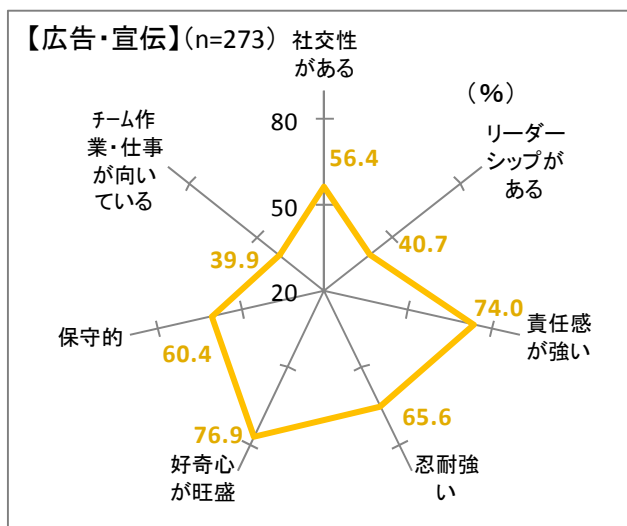
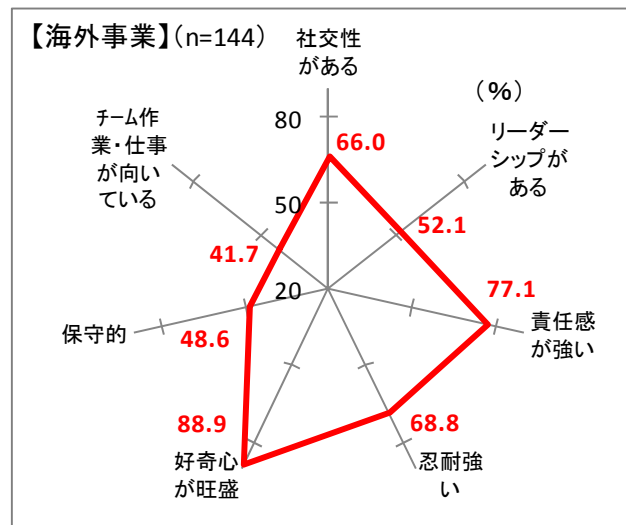
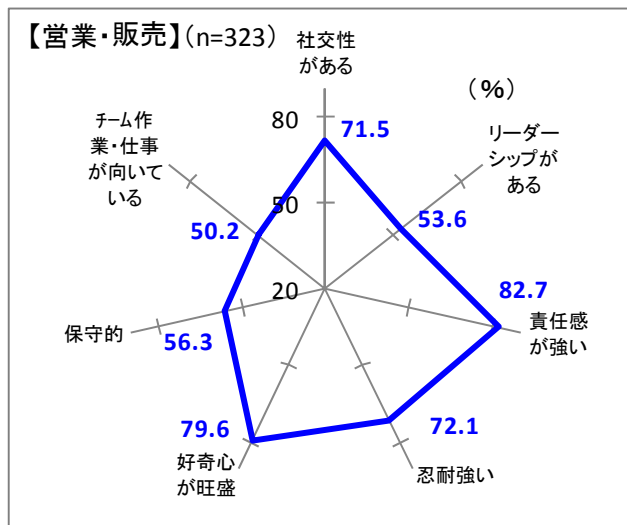
性格タイプと仕事での志望部門の関連を見ると、「営業・販売」「海外事業」志望者は、相対的に「社交性がある」「リーダーシップがある」「責任感が強い」「忍耐強い」「好奇心が旺盛」といったタイプが多くなっています。

また、「広告・宣伝」「調査・企画」志望者は、好奇心が旺盛ですが、社交性、リーダーシップは普通レベルのタイプが多くなっています。

「研究開発」志望者は、好奇心は旺盛ですが、社交性、リーダーシップ、チームでの作業・仕事といった面がやや弱く、また、「事務」志望者は、保守的であり、リーダーシップ、社交性、好奇心といった面がやや弱い傾向が見られます。

図表 6-3 志望部門と性格タイプ

(企業に就職志望の1～4年生が対象。「あてはまる」「ややあてはまる」の割合)



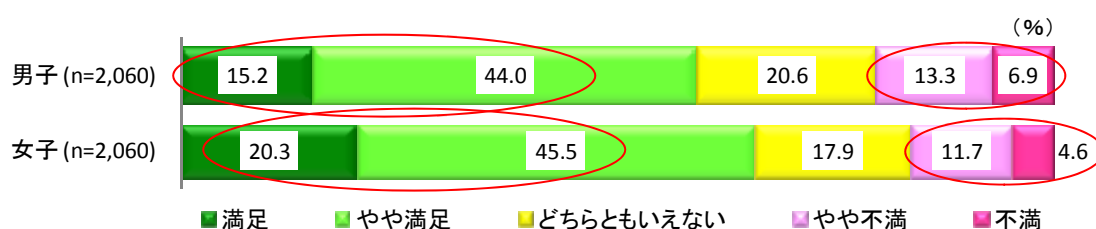
7. 大学生生活“満足派”と“不満派”

- “満足派”は仲間や恋人と一緒にいる時間、“不満派”はおひとりさまの時間が楽しい
- 満足と不満を分けるのは、大学生活から何かを得たという実感の有無
- 職業を意識した大学選びで大学生活が充実？

(1) 6割の大学生が大学生活に満足

「現在の大学生活に満足していますか？」という質問に対し、男子の6割、女子の3分の2が「満足」または「やや満足」と答えました。「不満」あるいは「やや不満」と回答した学生は、男女とも2割程度にすぎません。

図表7-1 大学生生活の満足度



「満足」または「やや満足」と回答した学生（“満足派”と呼びます）と、「不満」または「やや不満」と回答した学生（“不満派”と呼びます）を比較すると、以下のとおりさまざまな違いが見られました。

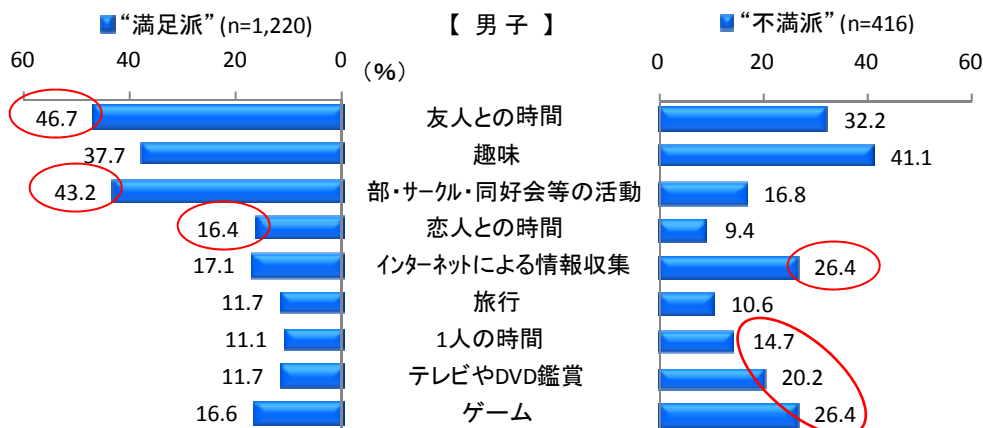
(2) “満足派”は仲間や恋人と一緒にいる時間、“不満派”はおひとりさまの時間が楽しい

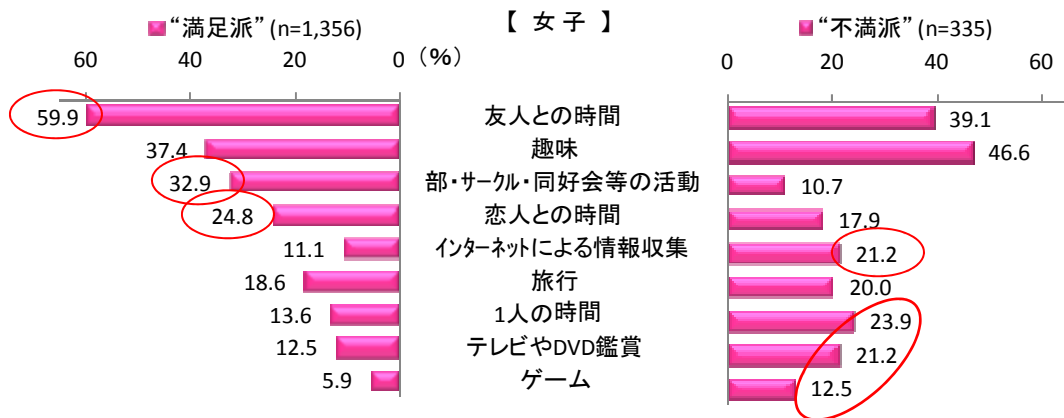
「特に楽しいと感じるのは、何をしているときですか？」という質問に対し、“満足派”は男女とも「友人との時間」が最多。特に女子ではダントツです。サークルや趣味も多く挙がっています。

“満足派”と“不満派”を比べると、“満足派”は「友人との時間」「部・サークル・同好会」「恋人との時間」のように他人と一緒に過ごす時間を楽しんでいる様子がわかります。逆に“不満派”は「インターネットによる情報収集」「1人の時間」「テレビやDVD鑑賞」「ゲーム」のようなおひとりさまの時間を楽しみを見出す人が多いようです。

大学生活を満喫するには、“人との交わり”が大切なキーワードだと言えそうです。

図表7-2 楽しいと感じるとき（3つまで選択。回答総数の上位9項目）



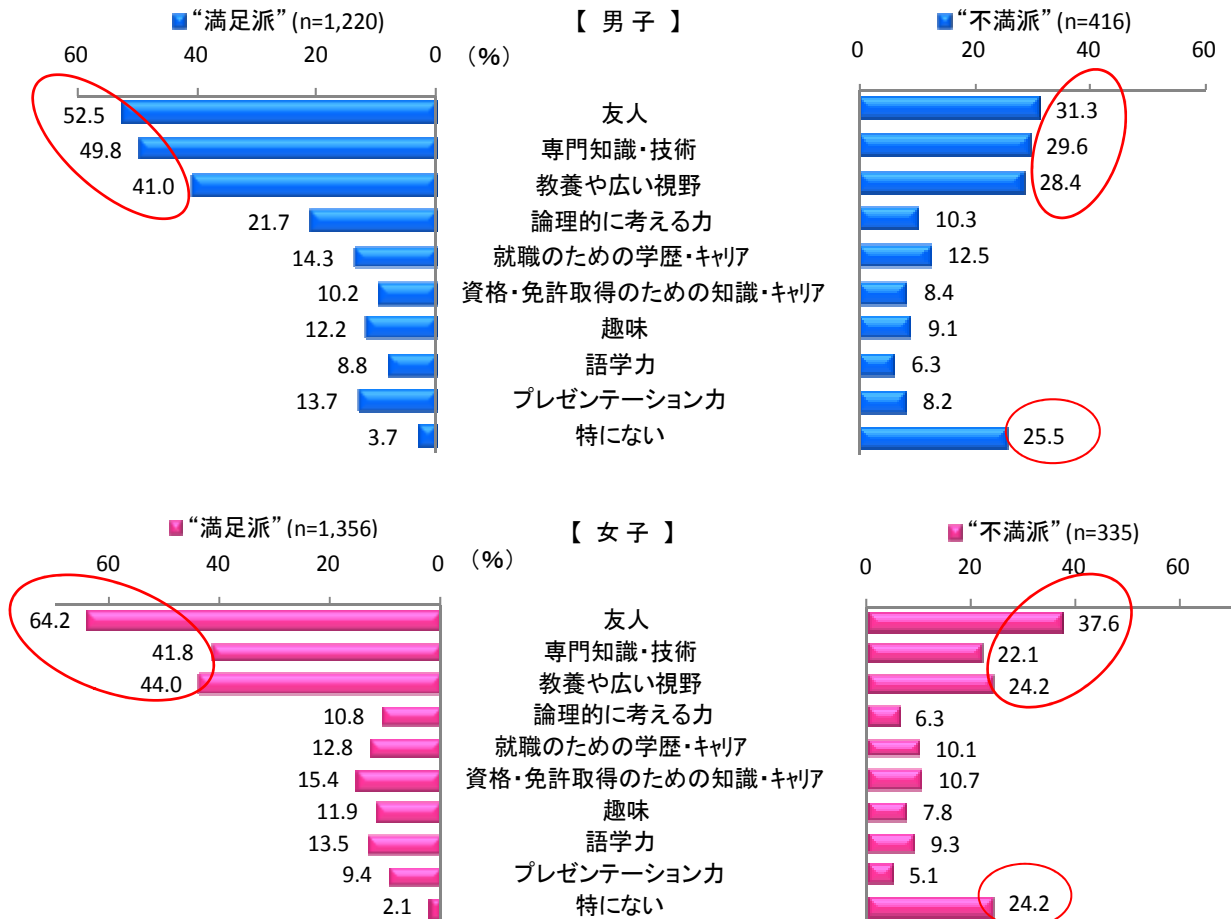


(3) 満足と不満を分けるのは、大学生活から何かを得たという実感の有無

「これまでの大学生活から得たもの」は男女とも「友人」が最多です。ただし、「友人」を挙げた割合は「満足派」が「不満派」を大きく上回っています。また、「専門知識・技術」や「教養や広い視野」のように大学の授業などから直接得られるものについても、同様に両派にはかなりの隔たりがあります。

さらに、男女とも「不満派」の4人に1人が「(大学生活から得られたものは) 特にない」と答えています。これは「満足派」にはほとんど見られない回答です。大学生活から何かしらを得たという実感の有無が、満足度を大きく左右すると言えそうです。

図表 7-3 大学生活で得たと思うもの（3つまで選択。回答総数の上位10項目）



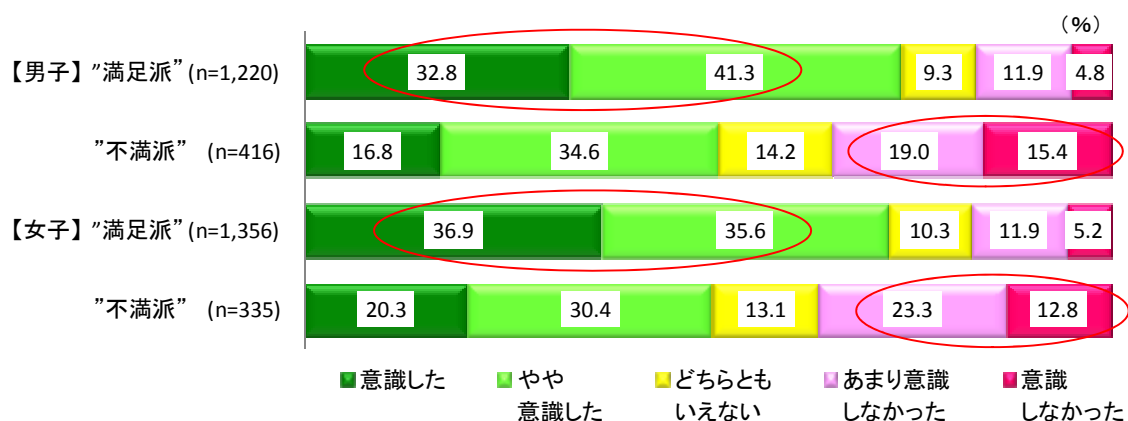
(4) 職業を意識した大学選びで大学生活が充実？

男女とも“満足派”の7割以上が、大学を選ぶ際に将来の職業を意識した（「意識した」と「やや意識した」）と答えています。

一方の“不満派”も半数は職業を意識していましたが、意識しなかった（「あまり意識しなかった」と「意識しなかった」）人の割合が、“満足派”の約2倍です。

将来に向けた目的意識を持って大学選びをすることも、大学生活の満足度を高めるポイントと言えるかもしれません。

図表 7-4 将来の職業を意識しながら大学を選んだか



8. 自宅通学とひとり暮らし

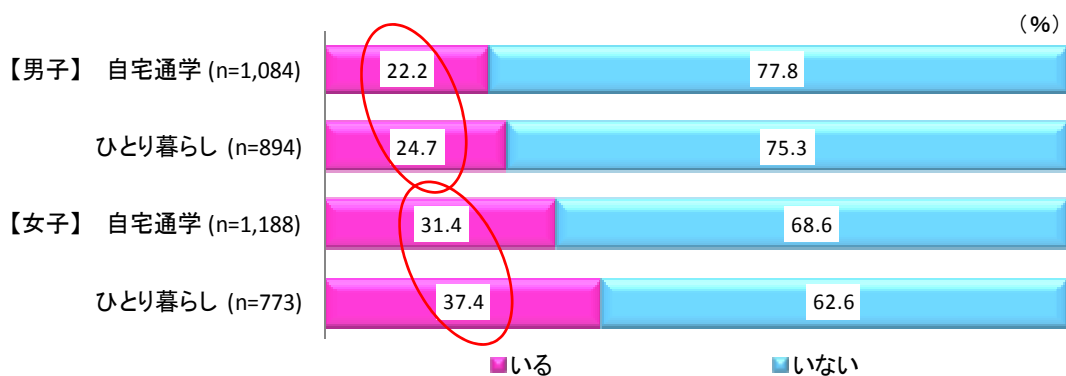
- ひとり暮らしは、
- ・ 恋人がしやすい？
 - ・ 結婚や子どもに前向き —— 少子化対策にはひとり暮らし？
 - ・ 社会人への助走効果あり？

自宅通学の学生と、アパートなど(学生寮を除く)でひとり暮らしをしている学生を比較しました。

(1) ひとり暮らしは恋人がしやすい？

自宅生よりもひとり暮らしのほうが、恋人がいる学生が多く、特に女子で顕著でした。家から離れた生活では、異性も含む他人と接する機会が増えますし、家族の目が届かない自由さもあるのでしょうか。

図表 8-1 恋人がいるか



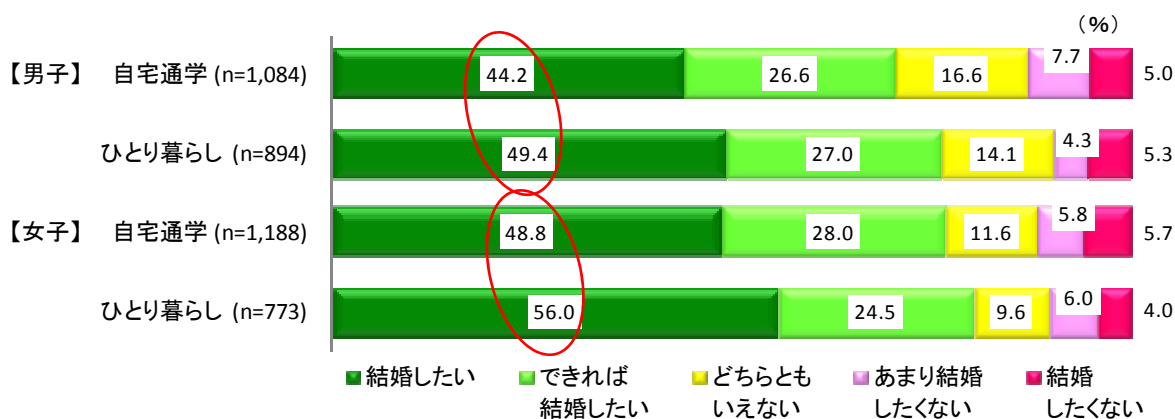
(2) ひとり暮らしのほうが結婚や子どもに前向き —— 少子化対策にはひとり暮らし？

結婚願望も子どもを欲する割合も、ひとり暮らしの学生が自宅生を上回っています。親元を離れた寂しさから、パートナーや分身を求める気持ちが強くなるのでしょうか。

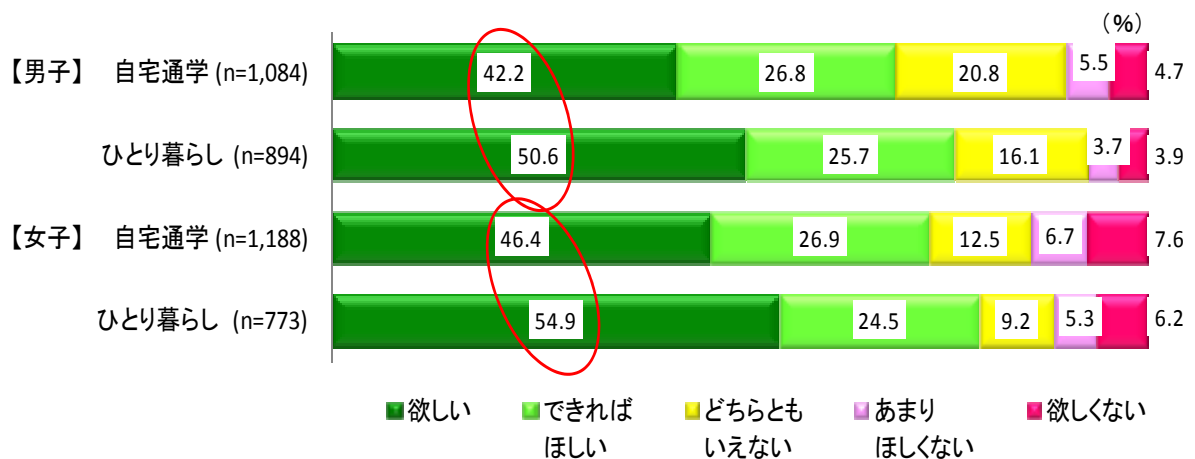
恋人がいる人はそれだけ結婚に対する考えもポジティブになります。女子の場合、ひとり暮らしのほうが恋人のいる割合が高いことも、理由に挙げられるでしょう。また、ひとり暮らしの不便さを解消したいという気持ちも多少はあるかもしれません。

大学時代にひとり暮らしすることが、少子化対策に役立つ可能性が感じられます。

図表 8-2 結婚したいか



図表 8-3 子どもが欲しいか



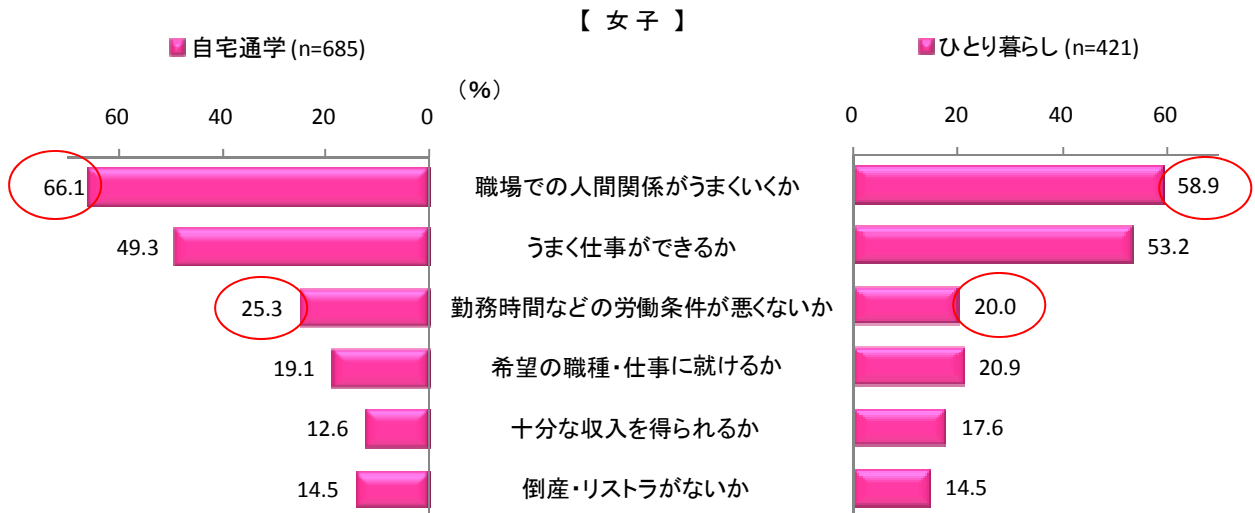
(3) ひとり暮らしは社会人への助走効果あり？

自宅生とひとり暮らしの学生を比較すると、特に女子に違いが見られたため、下の図表にその結果を示しました。ひとり暮らしの女子は自宅生に比べ、人間関係を心配する割合が 7.2 ポイント、勤務時間などの労働条件を心配する割合が 5.3 ポイント低いという結果が出ました。

学生時代にひとり暮らしをすると、両親の傘の下から離れて社会の現実と接する機会が多く、また他人とのコミュニケーションに免疫ができてやすいため、働くことや職場での人間関係への心構えができるという、社会人への助走効果が期待できるかもしれません。

図表 8-4 社会に出て仕事をするを想定した場合、どのようなことに不安を感じるか

(将来の進路に、企業、官公庁、教職を希望すると回答した女子)



9. 読書量と情報入手手段

- 大学生の4人に1人が本をほとんど読まない
- 情報入手手段はケータイより主にパソコン
- 就職活動には新聞も頼りに

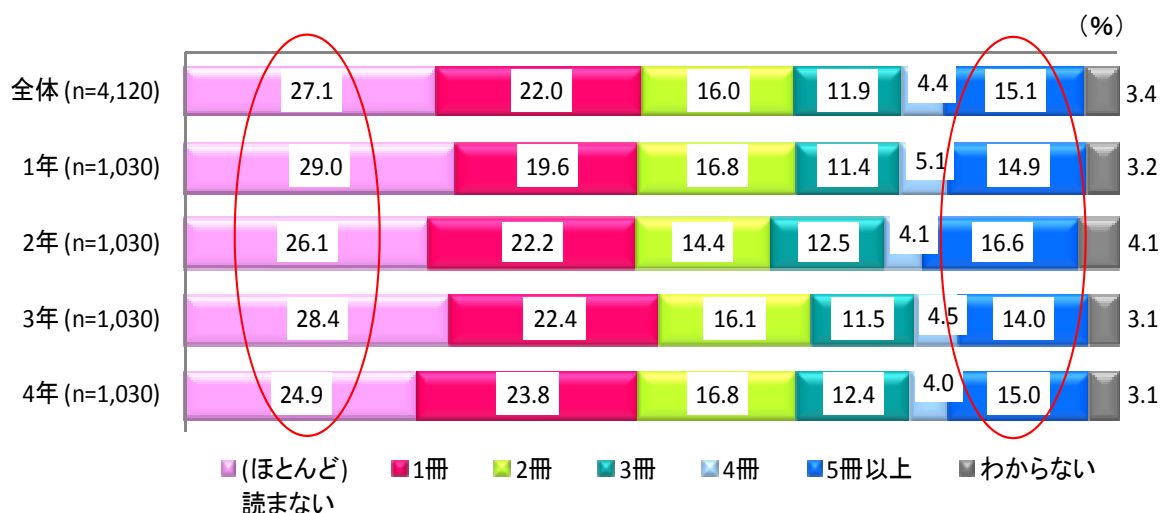
(1) 4人に1人が本をほとんど読まない

大学生の4人に1人以上が、授業に關係する書籍以外の本をほとんど読んでいません。これには目立った男女差はありませんでした。

本をほとんど読まない学生の割合は、1年生では約3割にのぼります。4年生ではやや下がるものの、それでも4人に1人は読書習慣がないようです。

一方で、約3割の学生が月に3冊以上本を読んでいます。月5冊以上という熱心な読書家も、6人に1人ほどいました。

図表9-1 1カ月に読む本（授業関連の書籍を除く）の冊数



なお、マンガについては、「(ほとんど)読まない」が男子33%、女子40%。一方、「月5冊以上」は男子25%、女子19%でした。マンガ好きは男子のほうが多く、学年による差はあまりありませんでした。(図表は割愛)

(2) 情報入手手段はケータイより主にパソコン

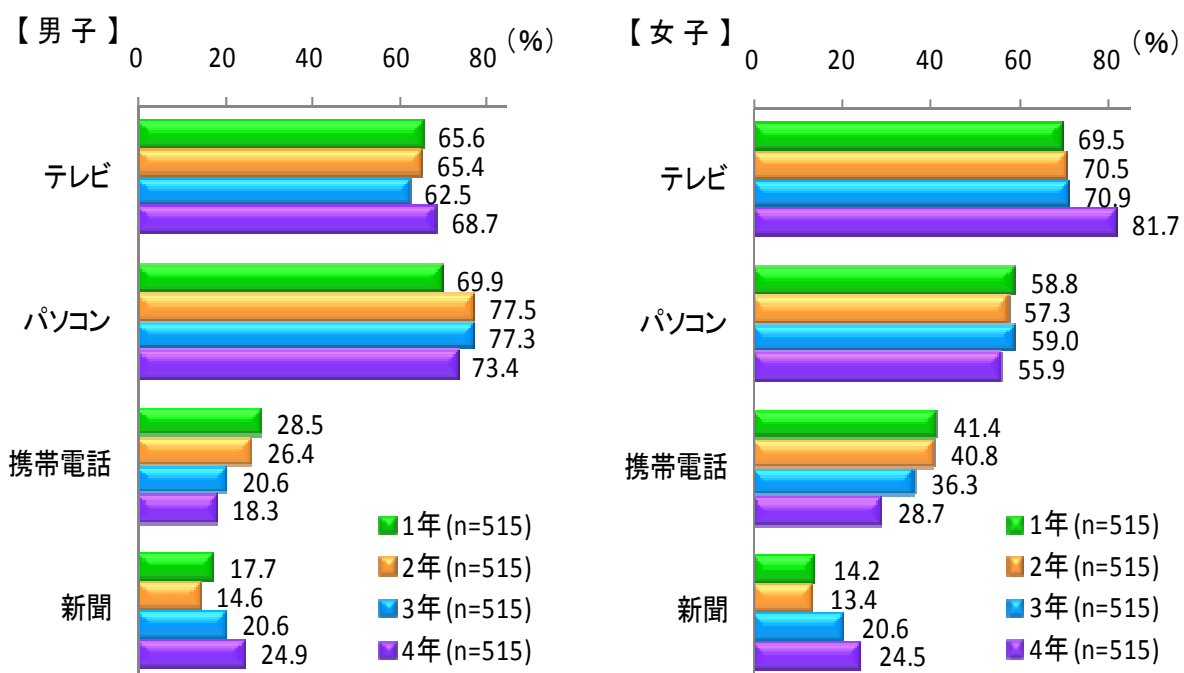
ニュースなどの情報入手手段は、テレビとパソコンが圧倒的です。

近年、若者の必須アイテムがパソコンからケータイにシフトしつつあると言われますが、情報入手手段としてのパソコンは依然として健在のようです。大学の授業や就職活動でパソコンを使用することも影響しているのでしょう。

ただし、女子にとってはケータイの地位は高く、とくに下級生では顕著です。

回答を2つ以内に制限したこともあり、新聞を挙げた人は2割前後にとどまりました。しかし、高学年になるにつれ、新聞の割合は着実に高まっています。就職活動などしっかりした知識が必要な時期になると、新聞を頼りにする学生が増えてくる様子がうかがえます。

図表 9-2 情報入手手段として主に利用しているもの（2つまで選択）



※ 選択肢にはほかに「ラジオ」（全体の 2.1%）、「携帯端末」（同 1.8%）、「雑誌」（同 1.6%）、「その他」（0.1%）、「特にない」（0.8%）があるが、図表では割愛。

10. マンガは、大学生の社会性醸成には役に立たない？

- 時事用語の理解度は、“書籍のみ派”が最も高い
- 社会的成熟度についても“書籍のみ派”が高い

書籍やマンガを1カ月に何冊読むかによって、以下の4つのグループに分けて、大学生の社会性との関係を見てみました。

タイプ	1カ月に読む量	
	書籍	マンガ
両読派	5冊以上	5冊以上
書籍のみ派	5冊以上	読まない
マンガのみ派	読まない	5冊以上
無読派	読まない	読まない

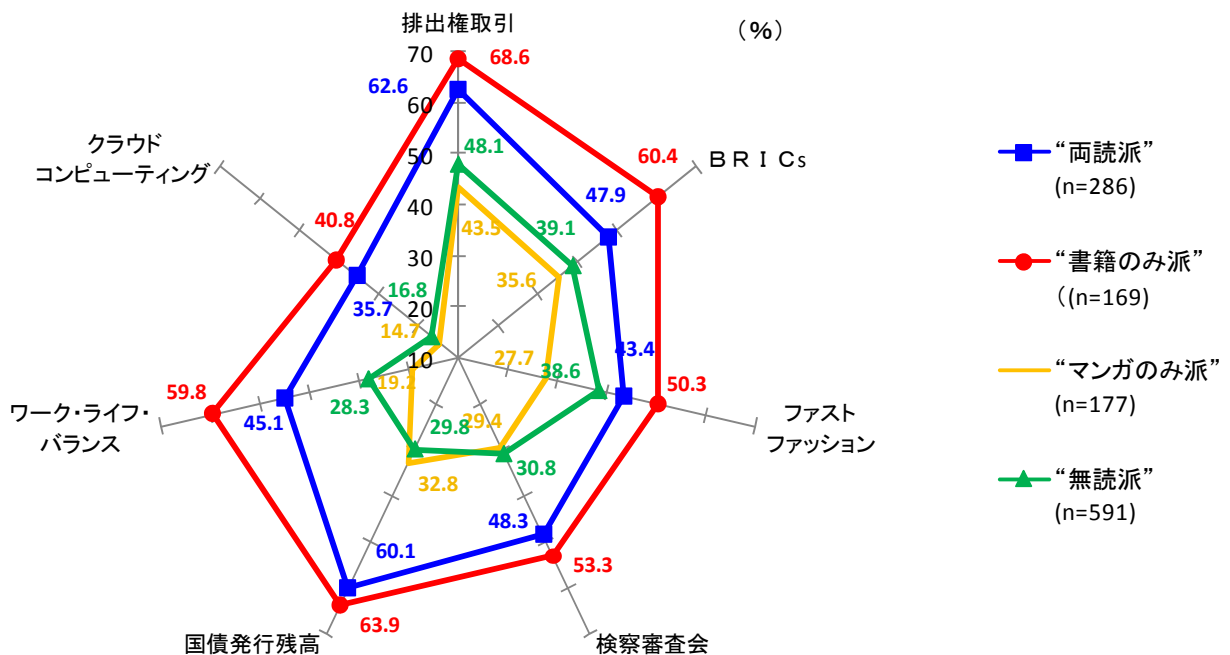
(1) 時事用語の理解度は、すべての項目で“書籍のみ派”が最も高い

上記の4つのタイプごとに、7つの時事用語の理解度を尋ねたところ、すべての項目で“書籍のみ派”の理解度が高いことが分かりました。書籍もマンガも5冊以上読む“両読派”の理解度が、“書籍のみ派”より明らかに低い点が注目されます。マンガを読むならもっと本を読めということでしょうか。

また、書籍を読まない“マンガのみ派”と“無読派”の比較でも、マンガを読まない“無読派”のほうが理解度は高くなっています。

社会常識を養うためには、書籍を読むことが重要であることはもちろんですが、マンガはほどほどが良いということかもしれません。

図表 10-1 時事用語の理解度

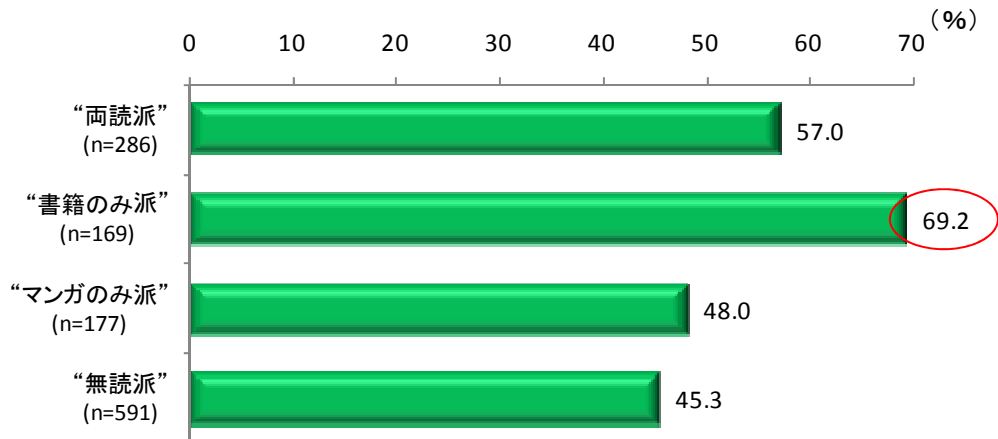


(注) 理解度は、「内容までよく理解している」「内容をだいたい理解している」と回答した人の合計割合。

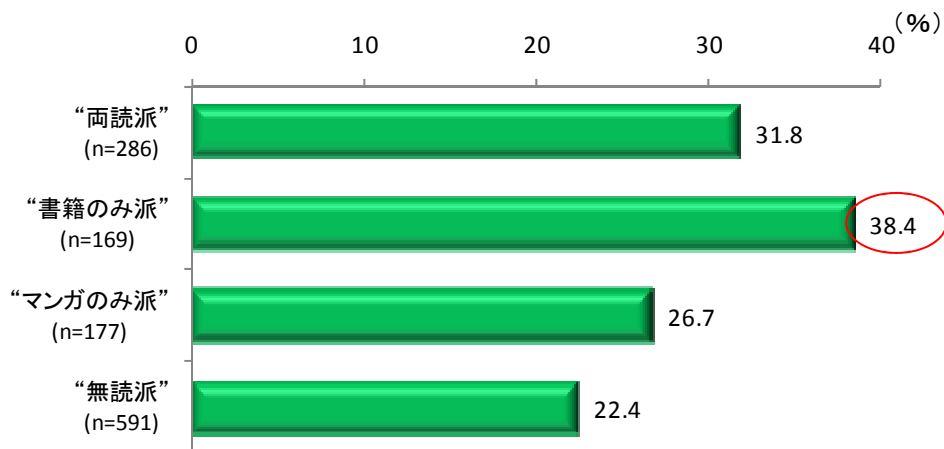
(2) 社会的成熟度を示す「社会への貢献」「親からの独立」についての意識も“書籍のみ派”が高い

書籍およびマンガを読む量と、社会的成熟度の関係について見たところ、多くの項目で“書籍のみ派”の意識が高いことが分かりました。特に顕著な傾向を示した項目は、「社会に貢献したい」「できるだけ早く親から独立したい」の2項目です。

図表 10-2 「社会に貢献したい」と考える人の割合



図表 10-3 「できるだけ早く親から独立したい」と考える人の割合



Ⅲ. 結婚観・子ども観

11. 結婚観

○4人のうち3人は「結婚したい」－女子のほうが結婚に前向き
○結婚したい理由－男子は“LOVE”、女子は“LIFE”
○結婚したくない理由－男子は自由にできるお金の減少、女子は束縛

(1) 4人のうち3人は「結婚したい」－女子のほうが結婚に前向き

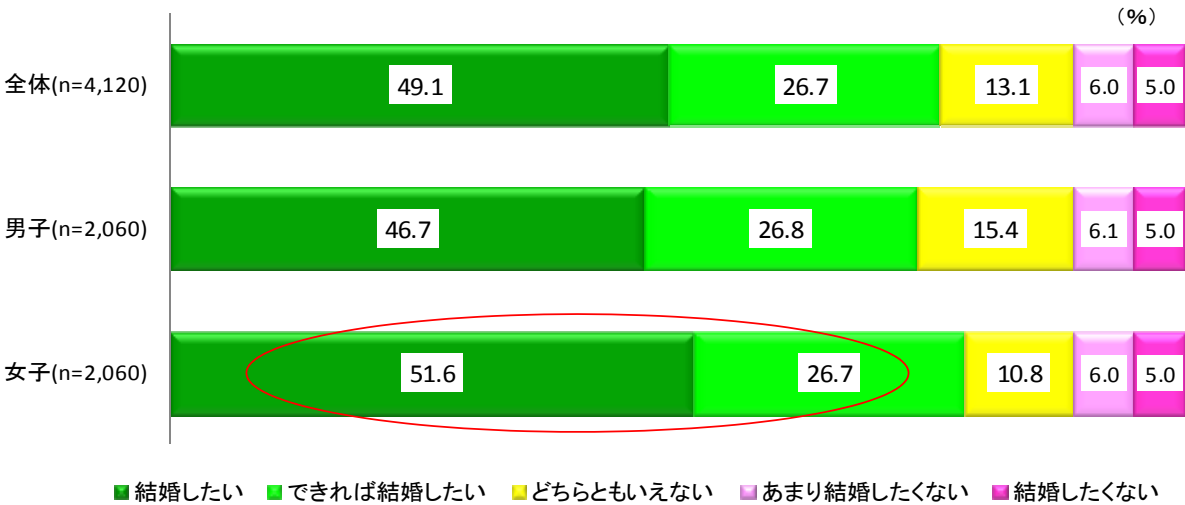
結婚したい人（「結婚したい」「できれば結婚したい」の合計）は、75.8%となっています。女子のほうが男子より結婚に前向きです。

弊社が20～39歳の未婚者を対象として実施した「2009年第5回結婚・出産に関する調査」では、結婚したい人の割合は、男性69.6%、女性70.0%ですので、結婚に前向きな人は大学生のほうが5ポイントほど高いことが分かりました。

実社会に出ると、収入や職業などさまざまな事情によって、結婚への意欲が減退していくのかもしれない。

また両調査とも、女性のほうが結婚に前向きな点は同様ですが、これはいわゆる“草食系”男子の増加を反映しているのかもしれない。

図表 11-1 結婚したいか

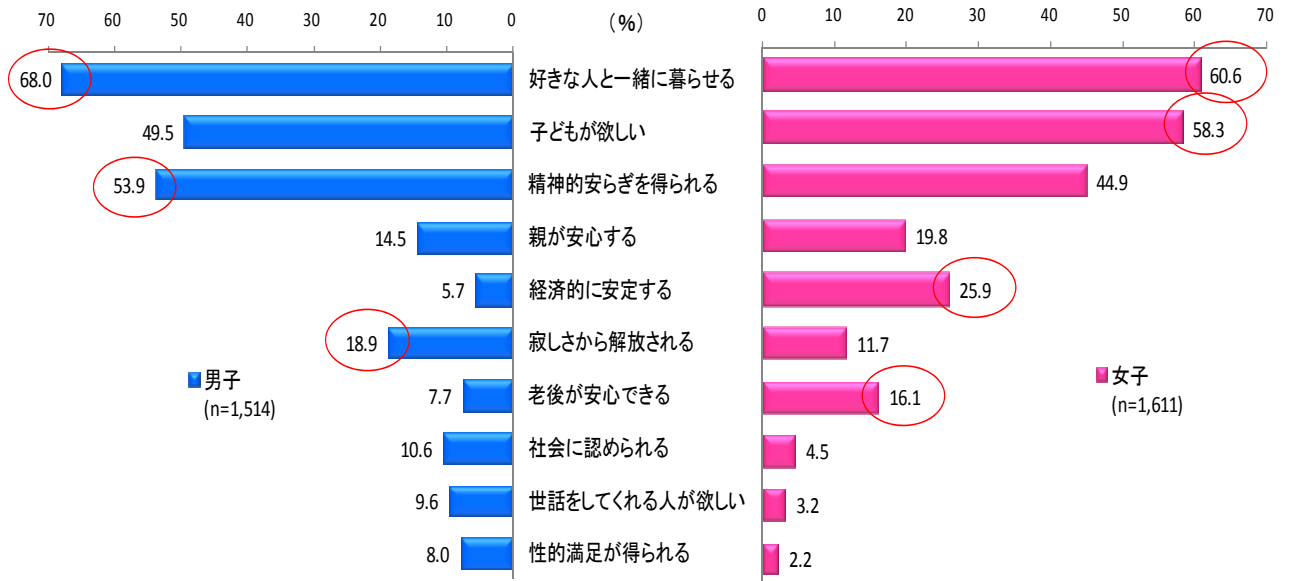


(2) 結婚したい理由－男子は“LOVE”・女子は“LIFE”

「結婚したい理由は何ですか?」という質問に対し、男女とも「好きな人と一緒に暮らせる」が最も多くなっています。

男女別に見ると、男子は、「精神的安らぎを得られる」「寂しさから解放される」が多く、精神的なつながりを重視する傾向が見られます。一方、女子は、母性本能からくるものか、「子どもが欲しい」が6割近くに達しています。また、「経済的に安定する」「老後が安心できる」の多さから、依然として配偶者に依存する傾向もうかがわれます。

図表 11-2 結婚したい理由（「結婚したい」「できれば結婚したい」人が対象）

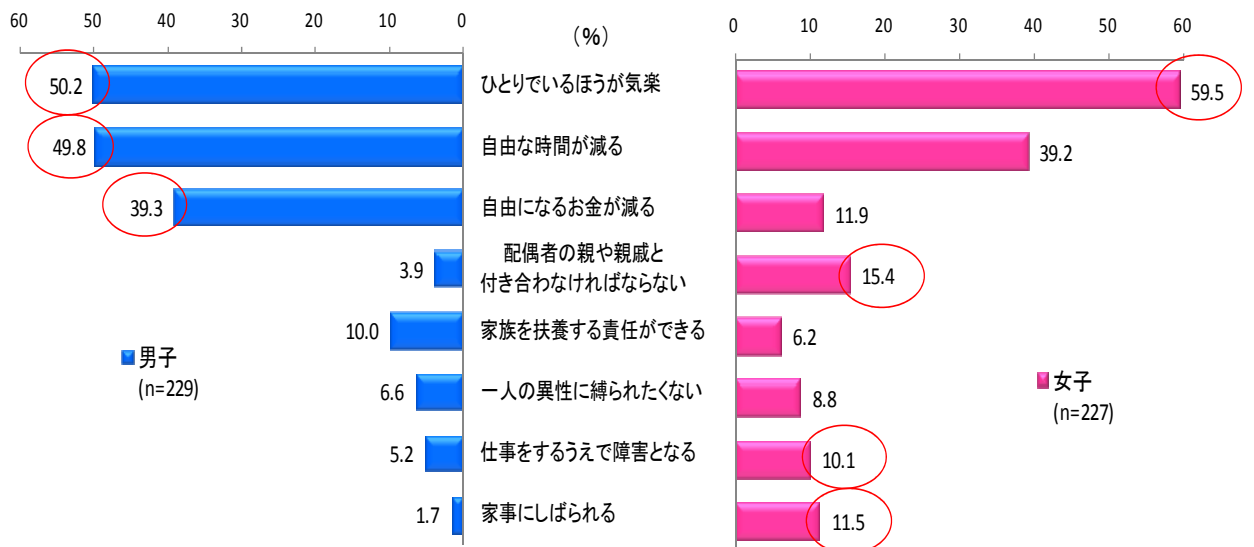


(3) 結婚したくない理由 — 男子は自由にできるお金の減少、女子は束縛

「結婚したくない理由は何ですか？」という質問に対し、男女とも「ひとりであるほうが気楽」が最も多くなっていますが、女子でその傾向が顕著です。

男子は、「自由な時間が減る」「自由になるお金が減る」など自分の好きなことをする時間やお金が減ることを嫌い、これまでの生活を変えたくない人が多いようです。一方、女子は、「配偶者の親や親戚と付き合わなければならない」「家事にしばられる」「仕事をするうえで障害となる」など束縛されることを嫌う人が多いようです。

図表 11-3 結婚したくない理由（「結婚したくない」「あまり結婚したくない」人が対象）



12. 子ども観

○4人のうち3人は子どもが「欲しい」

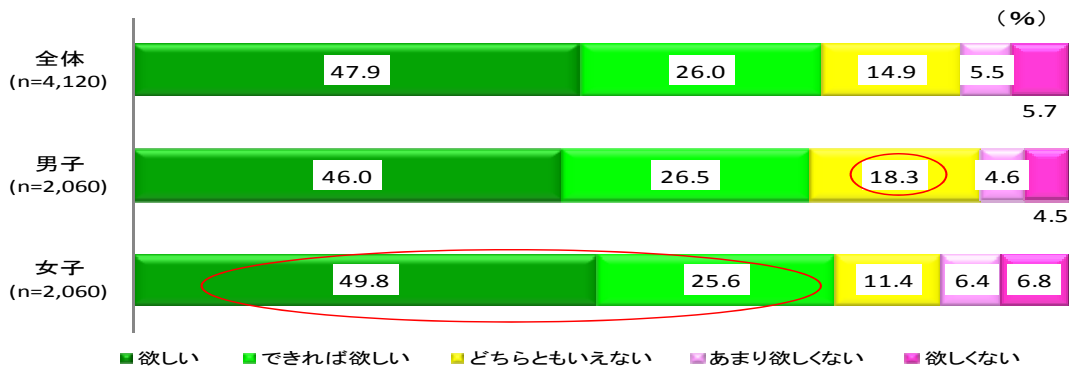
○欲しい子ども数は、2.03人—人口減少にストップはかからない

○子どもが欲しい大学生は、親の年収に比例—子育て費用に親の援助を期待？

(1) 子どもが欲しいか

「子どもが欲しいですか？」という質問に対し、「欲しい」「できれば欲しい」を合わせて4人のうち3人は子どもが「欲しい」との回答でした。この割合は、女子のほうが、男子よりも高くなっています。女子は、本能的に「子どもが欲しい」と思う気持ちが強いことなども要因の1つと思われます。一方で、男子は、「どちらともいえない」が多く、女子に比べてまだ子どものことまで考えていない人も多いようです。

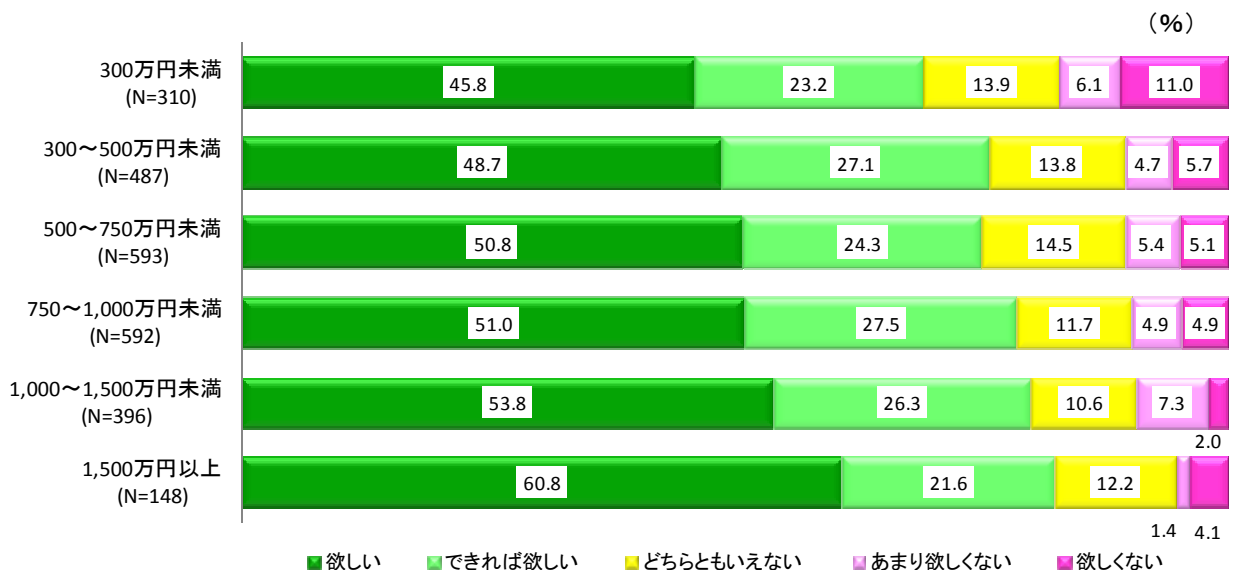
図表 12-1 子どもが欲しいか



大学生の子ども観に影響を与えている要因を分析してみたところ、親の年収との関連が強いことがわかりました。親の年収が高いほうが、子どもが「欲しい」が多くなる傾向がみられます。

親の年収が低い大学生は、自分自身が育てられた過程で、育児・教育費が大きな負担となっていたことを目の当たりにしてきたからでしょうか。また、将来自分が子どもを持っても、親からの援助があまり期待できないと思うことも要因として考えられます。

図表 12-2 親の年収と子どもが欲しいかとの関連



(2) 欲しい子どもの人数

子どもが「欲しい」と回答した人に対して、欲しい子どもの人数を尋ねたところ、平均で2.32人。男子は2.34人、女子は2.30人と男子のほうがやや多くなっています。

全体では、娘が欲しいという人が多くなっていますが、男子は息子を、女子は娘をと自分と同性的な子どもを希望する人が多くなっています。男子は息子との男同士の付き合いや自分の果たせなかった夢の実現を託し、女子は娘とのショッピングや老後の世話を望んでいるのでしょうか。

図表 12-3 欲しい子どもの人数（「欲しい」「できれば欲しい」人が対象）

(人)

	子ども数	息子	娘
子どもが欲しい人 (n=3,044)	2.32	1.13	1.18
男子 (n=1,492)	2.34	1.20	1.13
女子 (n=1,552)	2.30	1.07	1.23

(注) 子どもが「欲しくない」人を含めた回答者全員（「どちらともいえない」と回答した人を除く3,507人）で算出すると、欲しい子どもの人数は2.03人となりました。

日本の2009年の合計特殊出生率1.37は上回っていますが、人口維持に必要な2.08は下回っています。このままでは、人口減少にストップはかからないことになります。

大学卒業後の志望進路別に見ると、教職、専門職希望者で欲しい子どもの人数が多く、特に女子で多くなっています。一方、企業に就職、官公庁に就職希望の女子は、少なくなっています。教職や専門職では子育てがしやすい環境にあると大学生も考えているのでしょうか。

図表 12-4 進路志望別の欲しい子どもの人数（「欲しい」「できれば欲しい」人が対象）

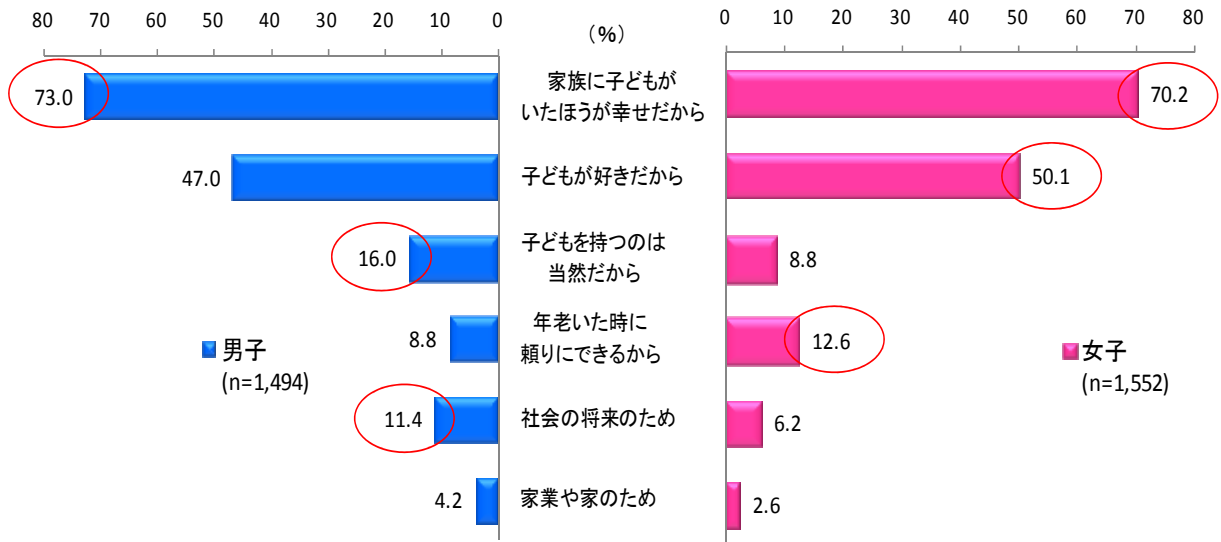
(人)

	全体	男子	女子
企業に就職 (n=1,371)	2.26	2.31	2.21
官公庁に就職 (n=199)	2.26	2.30	2.20
教職 (n=167)	2.36	2.24	2.44
資格を取得して専門職 (n=361)	2.43	2.39	2.45

(3) 子どもが欲しい理由

「子どもが欲しい理由は何ですか？」という質問に対し、男女とも「家族に子どもがいたほうが幸せだから」が最も多くなっています。男子では、「子どもを持つのは当然だから」「社会の将来のため」など子どもを持つことの社会的な意味合いを理由としてあげる人が、女子よりも多いようです。一方、女子では、「年老いた時に頼りにできるから」といった自分の将来を現実的に考える人も多いようです。

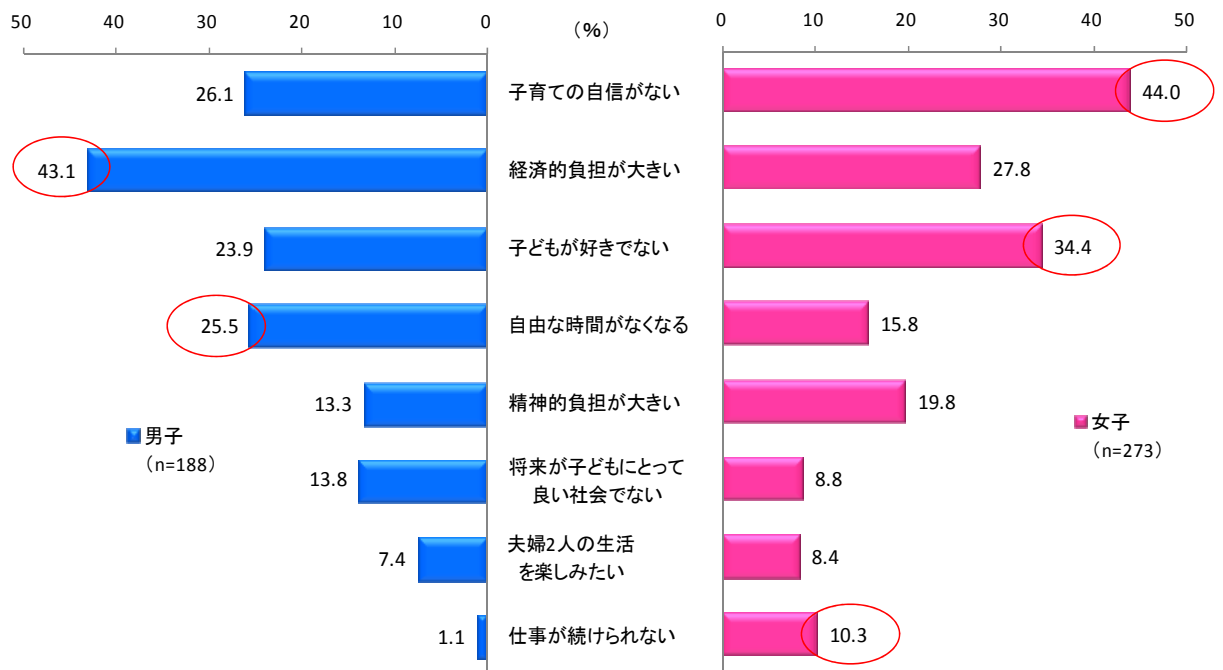
図表 12-5 子どもが欲しい理由（「欲しい」「できれば欲しい」人が対象）



(4) 子どもが欲しくない理由

「子どもが欲しくない理由は何ですか？」という質問に対し、男子では、「経済的負担が大きい」が最も多く、「自由な時間がなくなる」なども多くなっています。一方、女子では、「子育ての自信がない」が最も多く、「子どもが好きでない」も多くなっていると同時に、「仕事が続けられない」も男子に比べると多くなっています。男性が生活費を稼いで、女性が子どもを育てるといふ家庭内の役割分担意識がまだ残っているようです。

図表 12-6 子どもが欲しくない理由（「欲しくない」「あまり欲しくない」人が対象）



13. タイプ別の結婚観・子ども観

- “お仲間タイプ” は、結婚や子どもに前向き
- “おひとりタイプ” は、結婚や子どもにやや後ろ向き

(1) タイプ別の結婚観・子ども観

「特に楽しいと感じるのは、何をしているときですか？」に対する回答結果で “お仲間タイプ” と “おひとりタイプ” の2つのタイプに分けたところ、全回答者の7割がいずれかに分かれました。この2つのタイプによって、結婚観・子ども観の相違を見てみました。

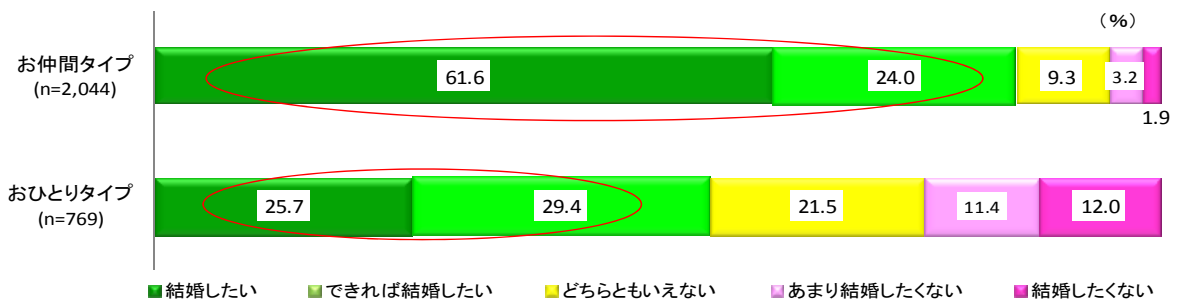
「恋人との時間」「友人との時間」「部・サークル・同好会」など人との触れ合いを大切にする “お仲間タイプ” は、結婚や子どもに前向きです。一方、「一人の時間」「インターネットによる情報収集」「ゲーム」などひとりの時間を楽しむ “おひとりタイプ” は、まったく逆の結果となりました。

大学時代は人との交流が大切であり、“お仲間タイプ” が増えていけば、未婚化・少子化に歯止めがかかることが期待できるかもしれません。

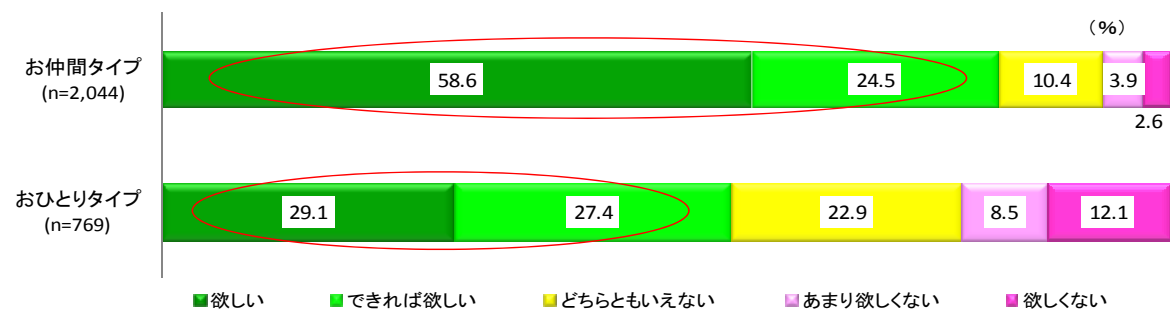
【タイプの分類方法】

	お仲間タイプ	おひとりタイプ
右のいずれかを 選択	「恋人との時間」 「友人との時間」 「部・サークル・同好会」	「一人の時間」 「インターネットによる情報収集」 「ゲーム」
右のいずれも 非選択	「一人の時間」 「インターネットによる情報収集」 「ゲーム」	「恋人との時間」 「友人との時間」 「部・サークル・同好会」

図表 13-1 タイプ別の結婚観



図表 13-2 タイプ別の子ども観



14. 結婚・出産後の働き方

- 共働きか専業主婦家庭か — 自分が育った家庭と同じ環境を求める傾向
- ひとり暮らしのほうが共働きに前向き

結婚願望のある学生（「結婚したい」または「できれば結婚したい」と回答した人）に、将来結婚して子どもができた後、どのような働き方を望むかを尋ねました。

（1）自分が育った家庭と同じ環境を求める傾向

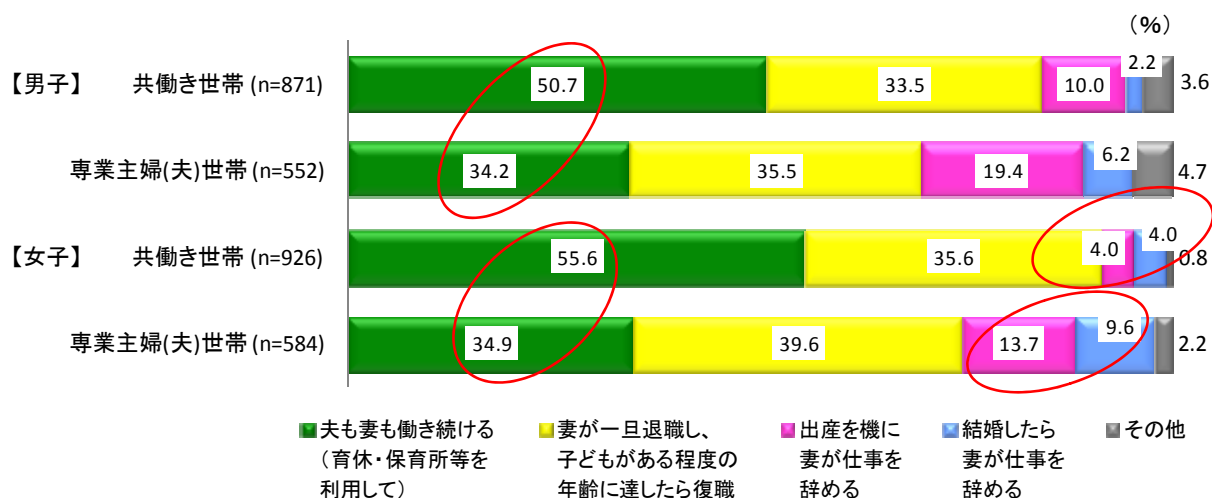
子どもができた後も、育児休職や保育所等を利用して「夫婦ともに働き続ける」と回答した割合は、専業主婦(夫)世帯の学生が3人に1人程度であるのに対し、共働き世帯の学生では半数を超えています。

逆に、結婚か出産を機に女性が仕事を辞めると答えた割合は、専業主婦(夫)世帯の学生が共働き世帯の学生の倍以上でした。

こうした傾向は男女ともに見られましたが、特に女子で際立っています。

男女とも、自分が育った家庭と同じ環境を、自分自身の結婚後の家庭にも望む傾向があると言えそうです。

図表 14-1 結婚して子どもができた時の働き方 — 共働き世帯・専業主婦(夫)世帯別（「結婚したい」「できれば結婚したい」と回答した人）



（2）ひとり暮らしのほうが共働きに前向き

ひとり暮らしの学生のほうが、子どもができた後も共働きを続けたいと考える人が多く、逆に、結婚または出産を機に妻が専業主婦になることを望む学生は、自宅生に多く見られました。この傾向は女子よりも男子のほうが顕著でした。

ひとり暮らしで生活費のやりくりを体験することによって、ダブル・インカムの必要性を感じる学生が多いのでしょうか。また、男子の場合、ひとり暮らしのスキルが身につくことによって、家に妻がいない状況も抵抗なく想像でき、共働きに前向きな考えを持つことができると考えられます。

図表 14-2 結婚して子どもができた時の働き方 — 住まい方別（「結婚したい」「できれば結婚したい」と回答した人）

